別冊

なきごえ

ただいま352世帯
アニマル一家

1981 大阪市天王寺動物園
大阪市天王寺動物園協会

序

昭和５５年９月初旬、動物園記者クラブの関西新聞社、東堤　正文記者から「ただいま３５２世帯アニマル一家」というテーマで、当動物園の動物たちを読者に紹介したいと相談をうけ、東堤記者のほかに、桧垣義宣、速水洋一　両記者も加わって、約２ケ月間、飼育担当者と直接の取材が始まりました。好評のうちに連載が終りました頃、二宮公園局長から「冊子にまとめてみては」と奨めの言葉がありましたが、私もそのようなことを考えておりましたので、早速、関西新聞社にお話しを申しあげましたところ、こころよく了解していただきましたので、これに若干の補稿を加えて「別冊なきごえ」として発刊することができました。

ご承知のとおり、動物園は幼児や小学生にとりまして、非常に楽しいレクレーションや勉強の場であり、市民からもこよなく愛されているところでありますが、よりよい動物園づくりをめざして、飼育担当者はもちろんのこと、花と緑の豊かな環境づくりに、また、動物たちの適正な冷・暖房や園内整備、入園者サービスなど、常日頃たゆまない努力をいたしております。

この小冊子が天王寺動物園の手引きとなり、ひいては、動物園を守る私たちの仕事にいささかの理解を賜わりますれば、非常にうれしく存じます。

なお、この紙面をかりまして関西新聞社に感謝の意を表します。

昭和５６年２月 吉 日

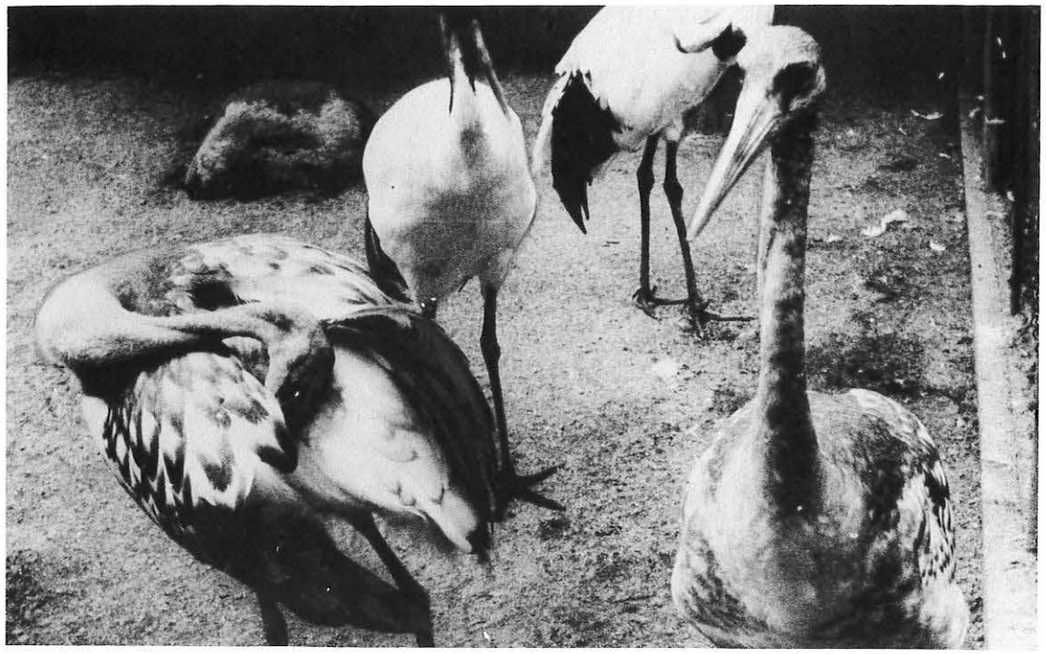
大阪市天王寺動物園長

橋　本　一　郎

目　次

1 夫婦円満子宝バンザーイ …… タンチョウ …… 1
2 まさにボスはスーパーマン …… ニホンザル …… 2
3 人間さま以上に好きものダ …… カ　バ …… 3
4 幸せいっぱいハレム暮らし …… アシカ …… 4
5 その昔インカの神だった …… コンドル …… 5
6 この礼儀正しさ見習ったら？ …… バーバリーシープ …… 6
7 あの華麗なダンスはトリック …… フラミンゴ …… 7
8 生きたニワトリを主食に …… アミメニシキヘビ …… 8
9 笑いすぎてクチバシ傷つけた …… ワライカワセミ …… 9
10 ホントは憶病でか弱いのデス …… ゴリラ …… 10
11 寝る時も長い首は上げたまま …… キリン …… 11
12 凶暴な父を横目に母子生活 …… モウコレイヨウ …… 12
13 生きた重戦車も妻には弱い …… クロサイ …… 13
14 ペットとして飼ってみたら？ …… ブ　タ …… 14
15 テレビのおかげでスターに …… アライグマ …… 15
16 毛皮好きの女性がヨダレを…… …… オセロット …… 16
17 二世の誕生は夫権復活待ち …… コウノトリ …… 17
18 往年の大スターが隠居して …… チンパンジー …… 18
19 おねだりのしぐさ可愛く …… マレーグマ …… 19
20 精力絶倫ぶりに圧倒されそう …… オランウータン …… 20
21 じわじわ体内に入り込む針 …… ヤマアラシ …… 21
22 ダチョウより指は多いんだゾ …… レ　ア …… 22
23 外敵は酔っぱらいの投石だけ …… ホッキョクグマ …… 23
24 やることなすことケタ外れ …… ゾ　ウ …… 24
25 いつまでもハイこのポーズ …… ミシシッピーワニ …… 25
26 ともかくオスは忙しいヤツ …… ヤブツカツクリ …… 26
27 ブランコなら一日中でも…… …… オオサイチョウ …… 27
28 鼻の穴を開いたり閉じたり …… ラ　マ …… 28
29 おく病だが権力争いはシ烈 …… キョン …… 29
30 飛べない空仰ぎパタパタ …… ペンギン …… 30
31 飛べない奇妙な鳥 …… キーウイ …… 31
32 赤ちゃんをさずける伝説の鳥 …… ヨーロッパコウノトリ …… 32
33 衣替えのお手伝いも命がけ …… インドニシキヘビ …… 33
34 孤閨かこつパンダ並み珍獣 …… クロオオカミ …… 34
35 動物の胃袋に合わせ大忙し …… 飼料係 …… 35
36 園外からも急患や保護願いが …… 動物病院 …… 36
37 園内唯一の便利屋さん …… 営繕・運転手 …… 37

1　夫婦円満子宝バンザーイ



中国からお嫁入りしたタンチョウ一家には子どもも増え、最高に幸せだ

タンチョウ

「タンチョウの国際結婚、うまく行くかな」とみんな首をかしげた。６年前のこと。

花婿は昭和２４年から住みついた老ヅル。花嫁は日中友好を記念して北京から贈られたピチピチの〝娘〟だったから。人間でいえば６、７０歳の老人と１２、３歳の娘に当たるわけ。

ツルにかぎらず鳥類は相性が難しい。同性同士で仲がいいのがいるかと思えば、つがいにしてもけんかばかりして結婚どころではない例も多い。

〝国際結婚〟をめぐる心配の１つはここにあった。だから婚前の交際には慎重に慎重を重ねた。半年間金網越しの〝清い交際〟の後、ようやく金網が除かれ、同じ屋根の下で暮らすことになる。

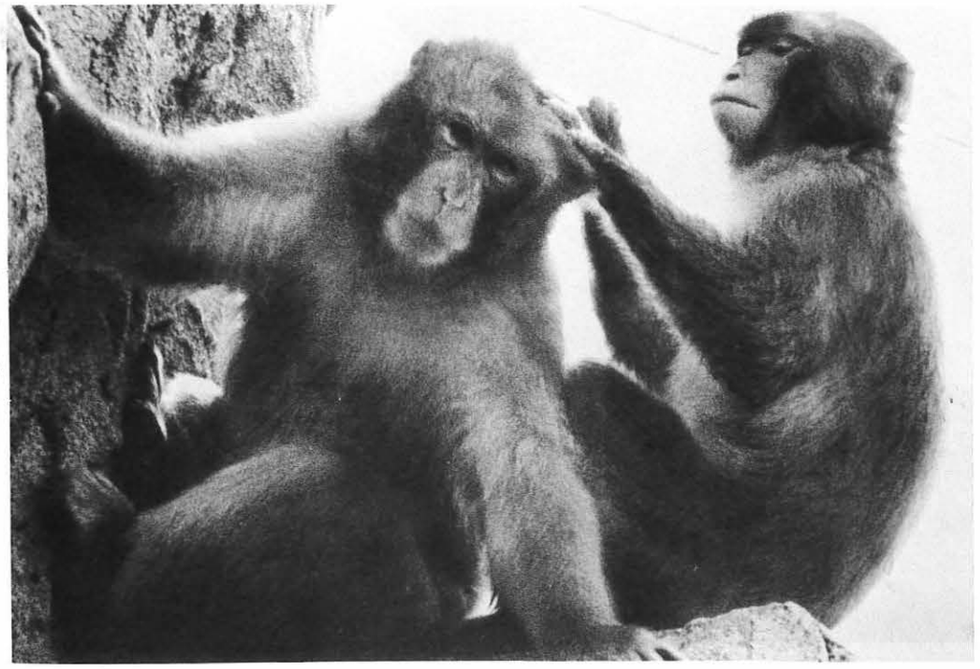
３７年からツルの飼育に当たっている浅田保夫さん（４１）は、いわば晴れがましい国際結婚の〝仲人〟それだけに随分気も使った。何しろ日中友好記念というシロモノ。エサ１つにも粗相があってはと心を砕き、ドジョウが大好物であることが分かると、さっそく韓国産のドジョウを取り寄せるなどてんてこまい。しかしこの夫婦がいきなり〝ハネムーンベビー〟を生むとは何ともうれしい誤算だった。

５１年５月２５日、いつものようにえさやりに来た浅田さんは雌ヅルが卵を抱いているのを見てビックリ。巣も作っていないのにどうやって卵を生んだのか ― じわじわと熱いものが込み上げてきた。最初の卵は神経質になった母ヅルがくちばしで割ってしまい浅田さんをガッカリさせた。が、巣作りの材料になるヨシズを入れてやると三日後にりっぱに巣をこしらえ、そこに二個目の卵を生んだ。

この卵をオスとメスが昼夜交代で抱き続け、６月３０日に、天王寺動物園で初めてハーフのヒナが誕生した。以来連続５年、毎年二羽のヒナが誕生、全部で１１羽という日本最多のファミリーとなった。

夫婦円満、子だくさん ― 幸せいっぱいのツル一家は国際親善もりっぱに果たしている。

2 まさにボスはスーパーマン



さりげなくたわむれている感じでも
サルの世界は権力と階級が支配している

ニホンザル

ボス、サブリーダー、メスガシラ、並オス、並メス ―
ニホンザルの世界は、人間の社会以上に階級制が強く整然としている。ボスの命令一下、配下のサルたちはそれに従わねばならない。が、人間社会がそうであるようにボスの命令を不服とする分子が、ボスの座を狙ってクーデターを起こす。№2のサブリーダーだ。

この争いの敗者は、離れザルとなり果て、グループから除外され、エサも群の〝おこぼれ〟を頂だいせねばならない。まさに〝信賞必罰〟― 仕掛ける側は〝大バクチ〟だ。

ボスの条件はきつい。血筋、腕力、頭脳明せき、さらに二枚目で子供を大事に育てる。などスーパーマン的男性でないと失格。勤務評定でいうと、指導力、許容力、寛容度、群の集合性（統率力）順位性……。歴代の総理大臣にもちょっと見当たらない。

現在、動物園には２３頭のニホンザルがいる。ボスの名は「天王」。ここ数年地位は安泰だ。サブリーダーがボスと年齢の開きがあるため、ひたすら恭順の意を表わしている。ボスも２年ほど前から骨格が張り、毛並も映え、ボスらしい風ぼうになってきた。

ここでは自然の中で生息する箕面や高崎山のサルのような激しい血の抗争劇はない。むしろ、ボスの正妻の座を狙ったメス同士の争いが活発だ。

２ケ月前、メスガシラが産後一週間目に子宮内膜炎で死亡。遺児の「優美」（メス）は飼育係の古下公彦さん（25）に粉ミルクやパン、リンゴなどの人工哺育で育てられている。

現在「優美」をサル舎に入れ、グループになれるよう懸命な努力が続けられているが、サルたちは「優美」のニオイをかぐだけで立ち去ってしまう。人間の体臭がついている「優美」に警戒心をもっているからだろうか。

「わが子のように育てた子ですし、愛着があります。でも、人工哺育のサルが群の中で生活した例はほかでも聞きません。見通しは暗いです。」と気がかりに話す古下さん。舎内には血肉を分けた兄弟もいるが、一緒に住み、ボスの支配下にいないかぎり、〝他人〟なのだ。サルの世界は厳しい。

3 人間さま以上に好きものダ

カバの母子の愛情は強い。母デブコの後をついて回るジュン。この母子が別れる日も近い

カバ

巨大な体に似ず、ユーモラスな表情。動きがご愛きょうのカバは園内では何といっても人気もののひとつ。猛獣とまではいかなくても体長４－５メートル、体重３トンにも達する〝野生の空母〟がひとたび暴れ出すとそのパワーは人間の想像を絶するものがある。

「カバは体に似ず草食動物特有の神経質な性格。だから恐怖のあまり防衛本能から暴れ出すんです」とカバの飼育係 丸本 守さん（35）。

現在、園内にはデブコ、フトシ、ナツコ、それに昨年１１月にデブコとフトシの間に生まれたオスのジュンの４頭がいる。しかし近いうちにジュンは収容設備の都合でよその動物園にもらわれて行く。飼育係はその母子のきずなを断ち切る役目を果たさなくてはならない。これが実につらい。

過去に三度デブコとその子供を切り離した丸本さんは「最初に生まれたムーミンという名の子と別れさせた時のことを覚えているんですね、二回目からは必要以上に私を警戒しています」と母性本能の強さを語る。

それにカバの性欲は相当なものでオスなどは年中発情期というから人間以上。出産をこれ以上抑えるため５４年、メスの発情期に当たる３月ごろデブコとフトシを別々の舎に隔離する苦肉の策を取った。が、ガマンできなくなったフトシはカギを壊し、デブコの部屋に〝不法侵入〟してしまった。困ったことに〝命中率〟がまた高い。その時の〝禁じられた恋〟の結晶がジュンちゃん。こんな情熱ゆえにカバの母子の愛情は強いのかも。

生まれた時からカバは水中で暮らすことが多いため人工哺育が難しく、人見知りもする。記者がナツコの舎に入って行くといきなりボタボタッと大きなフンを落とした。そのにおいに側にいたフトシが〝フーッ〟と鼻息を荒げた。どうやら初めて見る顔に驚いて〝神経便〟をもらしたらしい。それにしてもカバが見てお腹を下すオレってどんな顔なのか。

4 幸せいっぱいハレム暮らし

食っちゃ寝、遊び疲れるとのんびり日なたぼっこを楽しむアシカ一家

アシカ

体をくねらせてロケットのように突進する泳ぎぶり。「ウォー、ウォッ」と鳴く奇怪な声。目が大きく、口ヒゲを生やしたひょうきんな顔。アシカはちびっ子たちの人気ものだ。

天王寺動物園には、いま１０頭のカリフォルニアアシカがいる。一夫多妻の〝習慣〟が崩れぬよう10年前に来園したオス1頭にそのあと4頭のメスを加えるなど細かい神経の使いよう。幸せいっぱいのダンナさまは女房たちに平等に愛を分かち与えながら、毎年６月ごろせっせと励み、いまでは５頭の子供も生まれ、りっぱなファミリーをつくりあげている。

父親アシカは人間だと３０歳ぐらい。これからが働き盛りといったところだが、果報者のオヤジさん生活の心配もいらず池のまん中にある岩の上で大あくびの連発。子供たちはプールの中を気持ちよさそうに泳ぎ回り、母親たちは池端のコンクリート床に寝そべって何やらヒソヒソ話。

「わたしらの亭主はいつも寝てばかりいて仕方がないわね」とでもいっているようだ。

人だかりがすると全員お揃いで声をあげたり、体をくねらせたりのショーマンシップを発揮する。飼育係１８年目の東 政宏さん（３６）は「ことしは冷夏だったのでアシカにとっては過ごしやすいシーズンでした。そのせいかおとなしく、よく寝て食欲もおう盛です」と話す。

一家の食事時間は午前１１時ごろと決められている。主食はアジでふつうだと１頭で７キロほどたいらげる。「もともと動くものに興味をもっている動物なので、餌（え）付けが難しい。隔離プールに収容し、１０日間ぐらいは生きたアジを与え、冷凍ものに徐々にならして行く方法をとっていますが、これがなかなか思うようにはゆきません」と東さん。アシカは生まれついて〝美食家〟であり〝福満家〟なのだ。働くだけの亭主族にはうらやましいかぎり。

排便を定期的に検査するなど健康管理にも四苦八苦。おかげで一度も病気にかからず、一家水いらず平和なハレム暮らしが続いている。

5 その昔インカの神だった

仲がよくなったとは言え、必要以上にひっつかないコンドル夫婦
結局レンズにおさまったのは１羽だけ

コンドル

原始、コンドルはインディオにとって〝インカの神〟であった。が、１６世紀、コロンブスの新大陸発見から迫害にあったインディオと同じ命運をたどる。スペイン人の牧畜家には死肉を食い、子ヤギを崖からつき落とすコンドルは〝不吉な鳥〟と恐れられるようになった。

同園には、国内の動物園の中で最大の猛禽（もうきん）舎に二羽のコンドルが住んでいる。オスが「アンディ」、メスが「クロちゃん」。３２年入園のこの夫婦、仲がよくなく、夫婦然としなかった。というのも後妻の「クロちゃん」が食事時に「私が先に食べるの。後始末はあなたの役目よ」といわんばかりに弱気な「アンディ」を追い回し、するどい口ばしで羽をひきちぎった。

このため、「アンディ」の翼はまばらになり果て３メートル大の翼を広げるディスプレイにも迫力がなかった。しかし、慣れとは恐ろしいもの。妻から小さくなって逃げ回っていた夫も、自然と逃げ上手になり、やがて雄大な翼がよみがえり、夫の権威をとりもどしたのだ。５２年秋のことである。まさに〝雌伏〟２０年の永すぎた春だった。

夫婦らしさをとり戻した２羽に今年４月、初めて卵が生まれた。飼育係の農本武志さん（３１）の夢むなしくヒナはかえらなかったが、今の円満ぶりからみて二世誕生に期待がもてそう。

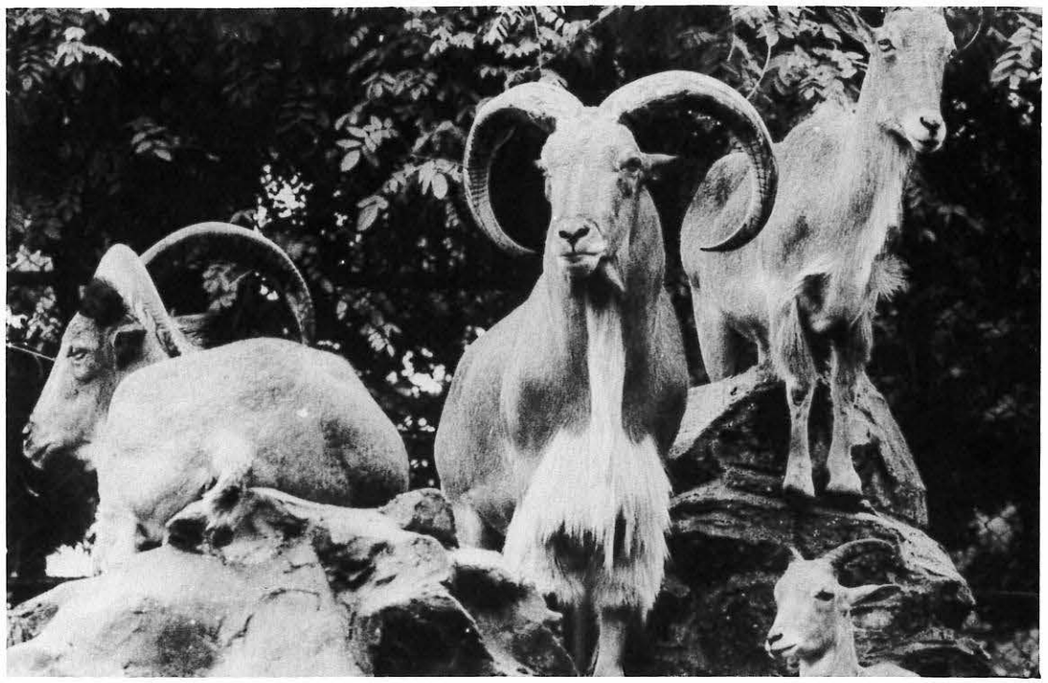
「アンディ」は農本さんと大の仲よし。金網越しにハゲ頭をなでられると、興奮してまっ赤な頭に変色。口ばしをつき出し、「キスして」といわんばかり。

このコンドル、南米の２千～６千メートル級の山に生息しているため、温度や湿度に敏感。〝天気予報〟もしている。

「雨が降ってる時に、羽を広げたら、もうすぐやむのがわかるんですよ」と農本さんが耳よりな話。

「何で天気予報は当たらんのやろ」といつも苦情を言われている気象台のおじさんもちょっと同園に足を運んでみたら……。

6 この礼儀正しさ見習ったら？



石こうのようにじーっと動かない温和なバーバリーシープ、スケッチのモデルには最高

バーバリーシープ

人工の岩山でのんびり暮らすバーバリーシープ。15頭が仲よく群れをなしている。二つの家族が親密な交際。昨年暮れから今年の初めにかけて3頭の子供が生まれた。いずれも母親のそばから離れない。「メエー」とヤギに似た声を出すことから、ほとんどの人は説明を聞くまでヤギと間違える。

オス、メス共に大きなツノを持ってのどから前肢にかけて長い毛のふさがあるため、たて髪ヒツジとも呼ぶ。当然、年齢と共に毛が長く伸びる。世帯主の判別は容易だ。2頭の父親は人間の年齢にすると40歳前後だろう。歩く姿にも風格があり、たがいに数頭の妻を従えている、というから一夫多妻制度。われらの父親族にしてみれば何ともうらやましい話だ。

元々北アフリカのチュニジア、アルジェリア、モロッコの岩山地帯が原産地。それだけに暑さに強いのでは、と思ったら「日本の夏には弱いのですよ。湿気があるからでしょう」と飼育係の仲谷 登さん（25）が教えてくれた。これを考慮してプールまで備え付けられている。幅1．5メートル 四方の小さなものだが心使いには感激。今年は冷夏。彼らにとっては比較的しのぎやすかったらしい。それでもプールは毎日利用された。彼らは実に礼儀正しい。まずプールに先客がいると決して中へ割り込もうとはしない。

水遊びが完全に終わるまでおとなしく順番を待っている。人間族にしたら耳の痛いことではないか。

おとなしい性格でけんかはほとんどしない。長老がボスとなって岩山の頂上で全体を絶えず監視、食事の時間ともなると、ボスがひと声鳴いて家族たちに知らせるという。サルのように実力を伴う社会でなく、どちらかというと年寄りがリーダーシップを取るといういわば自然発生型。機敏な割には日ごろほとんど動かない。写真撮影やスケッチのモデルとしてモテモテで、隣で画材を持ったある大学生は「書きたい時に自由に書けるから大助かり」とニンマリ。われわれ人間族にはいろいろと役立つバーバリーシープさまだ。

7 あの華麗なダンスはトリック

フラミンゴ

コウノトリ目だが、その生態は水鳥にも似た風変りなフラミンゴ。美しい姿に多くのナゾを秘めている

フラミンゴにはダンスがよく似合う。その姿は緋の衣のプリマ…。フラミンゴ科、本亜種オオフラミンゴ（ヨーロッパフラミンゴ）をはじめキューバ（ベニフラミンゴ）、チリーノレッサー（コガタフラミンゴ）など5種40羽が天王寺動物園に〝籍〟を置く。

フラミンゴをBGMに合わせて行進させたり、踊らせるショーは伊豆や宮崎フェニックスで観光の〝目玉〟となっている。しかし、同園のフラミンゴキーパー、山野道雄さん（30）は「あれはフラミンゴの非常に憶病で集団を組む性質を利用したトリック。人間が音楽に合わせてゆっくり追い立てるとフラミンゴもそれに合わせてゆっくり首をもたげたり、キョロキョロしながら逃げる。それが音楽に合っているように見えるだけ」と説明してくれた。それより山野さんの目にはフラミンゴがエサのドジョウを捕える時、水カキのある両足をそろえてバタバタとドジョウを追い込む姿の方がよっぽど可愛いダンスに映るという。

フラミンゴはコウノトリ目に属しているが、生息状況などからペリカンに似た性質を備えている。両足に水カキがあるのもその一つだが、泳ぐ姿はまだ確認されていない。また他の水鳥が下クチバシですくうように小魚を捕えるのにフラミンゴは平たい上クチバシで水面を掘るようにして小魚や水草を食べる変わった特性もある。

それに恐ろしく身の軽い鳥で昭和50年ごろ、台風に舞い上がって鳥取、宮崎まで飛んで行ったことがある。以来、片方の羽根を短く切り取って（断翼）逃避行を防いでいる。断翼すれば交尾が出きなくなるという説もあるが、確かな根拠はない。また独特の赤い色素の混じったエサを親鳥がヒナに与えるために人工ふ化ができないという説も。

20年間も住みついているのにベテランのキーパーや獣医でさえ、その生態をなかなか解明できない。〝珍鳥〟。その姿が美しいだけに〝ナゾ〟にも奥深さがある。

8 生きたニワトリを主食に

ヘビ類はその姿かたちでとかく偏見をもって見られやすいが、慣れてくるとハイ、このとおり

アミメニシキヘビ

47種、100点。これが天王寺動物園のハ虫類一家。なかでも、チビッ子たちの人気を集めているのがニシキヘビだ。

同園には、5種のニシキヘビがいるが、その偉容において群をぬいているのがアミメニシキヘビだろう。

アミメ。ビルマ、タイなどの東南アジアの熱帯ジャングルに住み、名前通り皮フが網の目状の模様で覆われている。世界一の体長で約10メートル。ライバル、インドニシキヘビと同様、木登り上手だ。水鳥、カモ、イヌやブタなどの家畜を襲い、現地人には恐怖の存在。

動物園では、2週間に1度、ニワトリ2～4羽が与えられている。食いだめができるのでこれが適量。一晩で軽く4羽をたいらげ、1年間くらい食いだめできるじょうぶな胃袋の持ち主。もちろん、〝生きえ〟だ。「ニワトリがかわいそう」などというなかれ。弱肉強食。人間が考えているようなヒューマニズムは自然界では適用しない。

〝適者生存〟— 人間も含め、食ったり食われたりの大きなサイクルの中でバランスが保たれている。

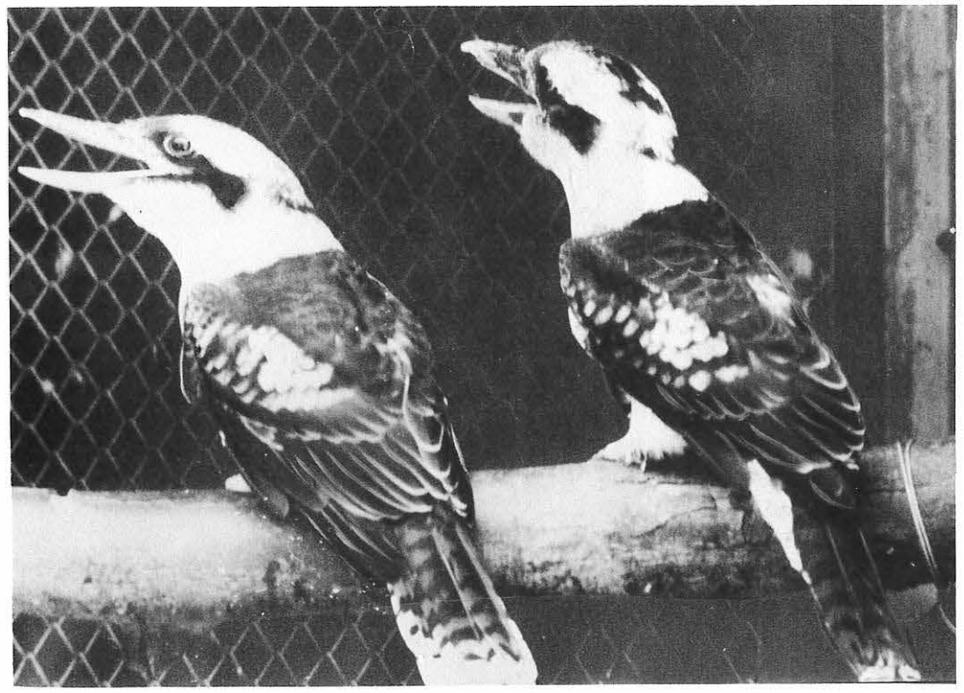
アミメの料理の仕方はこうだ。獲物の足をかみ、長い胴でしめつける。獲物が失神状態になると食いやすいように向きをかえて、頭の方からゆっくりのみこむ。

担当して3年目になる飼育係の芝野利夫さん(24)は「空腹時に、エサを持っていくと、カマ首をあげてかかってくるんですよ。ボクも本当は怖いです…」と本音をチョッピリ。ふだんは、トグロを巻いて寝そべったり、水浴びしたり。また同房のボアと木の上で折り重なってじゃれ合っている。

「3年前に小ヘビ室から現在の大部屋に移した時の体長は4メートルくらい。今は6メートルくらいかな。もっと大きくなりますよ」と芝野さん。

物音に敏感なアミメ。フラッシュをたくカメラマンも真剣そのもの。「安眠妨害するやつは、食ってしまうぞ」の不気味なかまえで舌をペロペロ。一発フラッシュをたいて逃げ出したのは言うまでもない。

9 笑いすぎてクチバシ傷つけた



この二羽、夫婦なのか姉妹なのか
直立不動で〝笑い〟の大合唱

ワライカワセミ

オーストラリアの国鳥、ワライカワセミ。大阪市とメルボルン市が姉妹都市となった記念に54年6月末親善使節としてメルボルンから天王寺動物園に贈られた夫婦2羽の〝珍鳥〟だ。オーストラリアでは番犬がわりに飼われるほどポピュラーな鳥だが、日本では同園にしかいない貴重な存在。

ワライカワセミはオーストラリアの湿原地帯に生息し、肉食でハ虫類が大好物。カワセミ科では最大の約30～40センチの体長。長い口ばし(約10センチ)で獲物の首をくわえて窒息させ、まるのみする。

もっとも入園当初は、飼育方法もわからず、鶉鶏(じゅんけい)舎飼育係の大川光雄さん(35)も〝献立て〟に試行錯誤がつづいた。コオロギ、イナゴ、カエル、オタマジャクシ……とあらゆる試食を講じた末、やっと主食はハツカネズミと水槽内のドジョウに落ち着いた。

入園1カ月目。大川さんの与えるエサに近づいて食べ始めた時はさすがにうれしかった。そして、9月に2個、10月に6個の産卵。早くも2世誕生かと色めきたたせた。が、いずれも無精卵だった。

この2羽、本当にオス、メスのつがいなのか。同園でもはっきりと確認していないようだ。

「オス、メスの判別は、染色体で調べなければわからないですわ」と大川さん。

ワライカワセミの面白い特徴は、人間の笑い声のような鳴き声。明け方によく鳴くらしい。大川さんが指で突っつくと「ウッウッ、カッカッカー、ワッハッハー」と直立不動の姿勢で夫婦で大合唱。かっては客サービスで日に3度鳴かしていたが、週2日に減らした。心ない客が鳴き声を録音したテープを夫婦の前で流すからだ。これを聞くと2羽は急に暴れ回る。セメントにぶつかり、口ばしを傷つけたことも度々。

これは〝テリトリー侵犯〟による狂乱現象。近くで同じ鳴き声を聞くと、敵のワライカワセミにナワ張りを荒らされるとカン違いするらしい。

「愛敬もあるし、人なつっこい性質です。秋口の季節の変わり目にカゼをひかないかと心配です」と語る大川さん。親善使節、気苦労も多い。

10 ホントは憶病でか弱いのデス

減び行く野生動物たちーその象徴にさえ思えるのがゴリラだ。頑丈そうな骨格と盛り上がった広い胸、黒光りした艶のある毛並み。また、その表情にはたくましい野性の中に霊長類特有の知的な瞳と優しさを秘めている。半世紀前の映画「キングコング」の製作者もきっとゴリラの姿に畏怖と憧憬の念にかられ２０メートル余もの〝怪獣〟を生み出したのかも。

霊長目、オランウータン科、ゴリラ。イメージ的には〝怪獣〟だが、それはたいへんな誤解。実際は憶病でか弱い草食動物なのである。もちろん人を襲ったりなどしない。

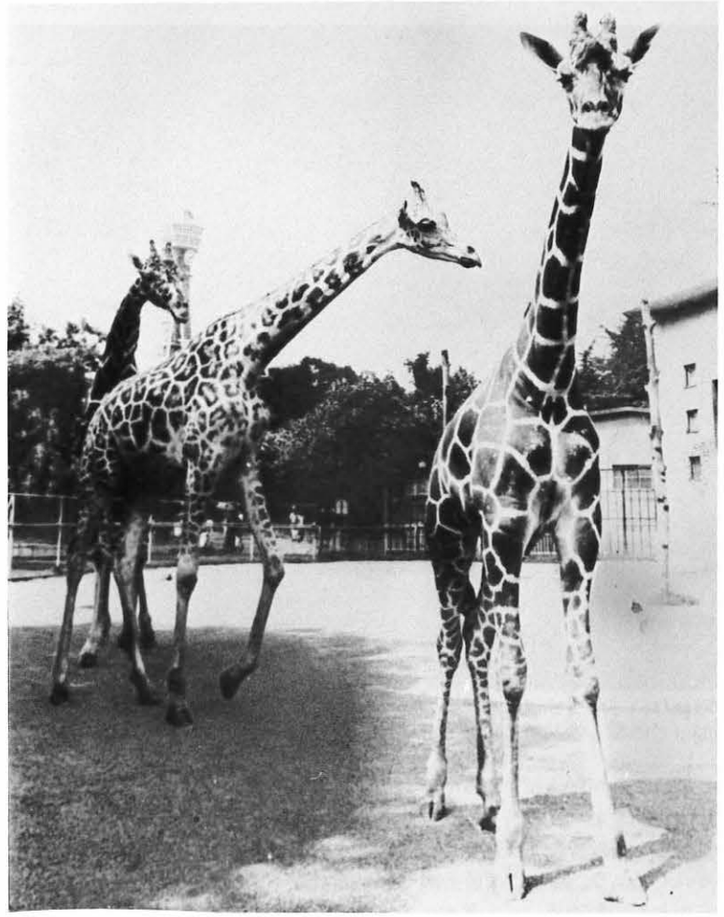
夫のゴローを上から見降ろすラリー。人間社会に片足突っ込んでいても頼りがいのある〝最愛の人〟はやっぱりゴローだ

来園したのは比較的新しく昭和４２年５月にオスのゴロー、つづいて翌４３年８月にメスのラリーが。このカップル仲はよいのだが、いまだに〝愛の結晶〟は生まれていない。同園キーパーの大野尊信さん（35）は「性本能が淡泊なうえに、交尾行為も学習して覚えさせないとなかなかできない」という。野生のゴリラは〝慣習〟や仲間の〝教育〟で自然に覚えるが、動物園で飼育されたゴリラはその機会がないのだ。だから生涯〝無交尾〟のままで終わるケースも多い。しかし、性的欲求の表れか、ときどき大野さんにジャレて抱きついたりすることもあるという。

メスのラリーの生理は人間の女性と全く同じ。しかしオスの機能ははるかに人間以下だという。ここらへんが滅び行くゴリラと生き残った人間との差異なのだろうか。そう思うと同じ先祖を人間とゴリラに分けた大自然の条理に畏敬を抱く。

飼育されたゴリラにもそれなりのタテ社会があると大野さんはいう。ゴローとラリーにそれぞれ一対一で接する時はめったにむずかることがないのに、２頭といっしょの時はたまにラリーが言うことを聞かない。「やはり夫婦なんですね。ラリーにすればゴローは私以上の存在。力があり、魅力があって最高に甘えられるベターハーフと思っているようです」と大野さん。人間社会で滅びつつあるもの(?)がゴリラの世界には残っているらしい。それは裏返せば滅びつつも最後の一線を人間と分かつ野性の姿にも思える。

11 寝る時も長い首は上げたまま



世界一ノッポの動物キリン。憶病だが、人なつっこく、人が近づくと寄ってくる。主人のタカオは孫娘と若いお嫁さんと３人暮らし

見物人がさくのそばに立つと２階屋根の高さからゆう然と見下ろし、ベローッとよだれをたらしながら寄ってくる人なつっこい動物。

陸上動物では１番のノッポ。偶蹄目、キリン科、キリン。原産地はアフリカの草原地帯。天王寺動物園にいるのはアミメキリン。ほかにマサイキリンなど12亜種がいるという。

同園の最ノッポは最長老でオスのタカオ。６メートルはあるというからさぞかし〝ニラミ〟がきいていることだろう。タカオは昭和３４年にもう１頭のメスとペアで入園して来た。３９年に２頭の間にメスのキリンが誕生するとタカオはムスメのキリーと夫婦となり50年８月にメスのリツコが生まれた。キリーはそのほかにも死産や早産を含めて９回も出産したが今年３月、産後の日だちが悪く、それが原因で死んでしまった。

何頭か出園させたり早死させてしまい残ったのはタカオとその孫に当たるリツコの２頭。これではさびしいと４月にみさき公園からメスのサキコちゃん（１才７ケ月）を招いた。現在タカオ、リツコ、サキコの３頭暮らし。

キリンの妊娠期間は１５ケ月。６～７年で成長、発情期は自然に訪れ、エサもよくなったせいか繁しょく力は比較的強い。

「リツコもサキコもまだ１人前のメスになってないので出産は小康状態」とキーパーの野口秀高さん（34）は言う。草食動物の例にもれず性格は憶病でおとなしいが、人なつっこい面もあり、人が背中に乗れるまでなれることもある。それに持って生まれた神経質な性格。「寝室の模様替えをすると色や配置の変化になじめないのか入るのをいやがったりする」と野口さん。

なんといってもご愛きょうなのはトレードマークの長い首。

「寝る時は ― 」とたずねたら、「子供の時は首を背中の方に曲げているが、成長すると首の筋肉が発達するのか首はあげたまま座って寝ている。」との返事。敏感で夜中見回りに行ってライトをつけるといつでも目を開けている。という。年ごろの〝ムスメ〟だもの、寝姿を見られるのが恥ずかしいのかも。

12 凶暴な父を横目に母子生活

親にくっついて離れないモウコレイヨウの子ども。おシリにハート型のシンボルマークが…〝凶暴〟の父親とは目下、別居中

モウコレイヨウ

野草のじゅうたんが敷きつめられた庭で、やわらかな初秋の日差しを受けて遊び回るモウコレイヨウ。49年8月、日中友好の動物使節としてメス、オス2頭が来園した。この珍らしいウシ科の動物は中国・北京とわが国では天王寺動物園でしか飼育されていない。目がクルクルと愛くるしく、かけ回る姿にも愛きょうがある。

いかにも日本的な名前がついているのは、ゴビ砂ばくあたりに生息しているからで、来園後に命名された。中国名は「黄砂羊」という。北京の視察団が天王寺動物園を訪れた時、ナウな呼び名を聞き、驚きの声をあげた、とか。

親善動物というせいもあって、山野道雄さん（30）らの飼育係はモウコレイヨウにつきっきり。山野さんは「この動物に関した資料が中国でもほとんどないので飼育にはかなり神経をつかっていますが、未知の分野を手がける喜びも感じていますね」と話す。

体毛が茶かっ色で尾に白いハート型のマークがあるのが大きな特徴。シカと似ているが、性格はやや荒っぽい。とくに、オスはエサを与える時でも突進してくるほどだ。

最初、オスとメスを同居させていたが、お互いケンカが絶えないため、交尾期以外は別居生活が続いている。高さ2メートルほどの壁で仕切られており「時には寂しいこともあるのでは…」と聞くと山野さんとコンビを組んでいる村田行雄さん（30）が「たとえ夫婦でもいつも知らん顔。もともと勝手気ままな性格なんですよ」と教えてくれた。

いま夫婦の間に生まれた2頭のメスの子供たちが母親と仲良く暮らしている。52年と54年生まれ。〝母子家庭〟と変わりがない。父親が仕切りのそばまで近づくと、あわてるようにサッと逃げてしまう。

どこの世界でも〝凶暴〟な父親は嫌われるようだ。それに比べ、母親は〝過保護〟と思えるぐらい子どもたちをかわいがっている。

13 生きた重戦車も妻には弱い

オスでもメスでも強い方が実権を握るクロサイ── 全く人間そっくり。〝主人〟のサイ王クンは〝女房〟のサッちゃんのしりにしかれっぱなし

クロサイ

全長3メートル、高さ1.5メートル、重量1.5トンにもおよぶ体躯はまさに〝生きた重戦車〟。原産地アフリカ、ほ乳類、奇てい目、サイ科、クロサイ。

よろいをまとったような風貌と鼻の上の2本の角がいかにも戦闘的。が、小さなひとみはどう見ても神経質。これは草食動物特有の性格。

実際、「クロサイはサイの仲間では最も神経質で気が荒い」とキーパーの三浦正明さん（35）

平地の草しか食べないシロサイと違いクロサイはアカシアの葉や木の芽を好む。そのせいかシロサイの上唇は平たいのにクロサイの上唇はとがっていてそれで器用にエサを巻き取って食べる。

地面に落ちた小さなアカシアの葉を大きな口で上手に一つ一つ食べている姿は実に愛きょうがある。

天王寺動物園に初めてサイが入って来たのは昭和30年のこと。以来、出園や死亡もあって現在いるのは4代目サイタロウと5代目バーバラの間に47年2月に誕生した6代目、メスのサッちゃん、それに51年4月に入園した7代目オスのサイ王夫婦の2頭。

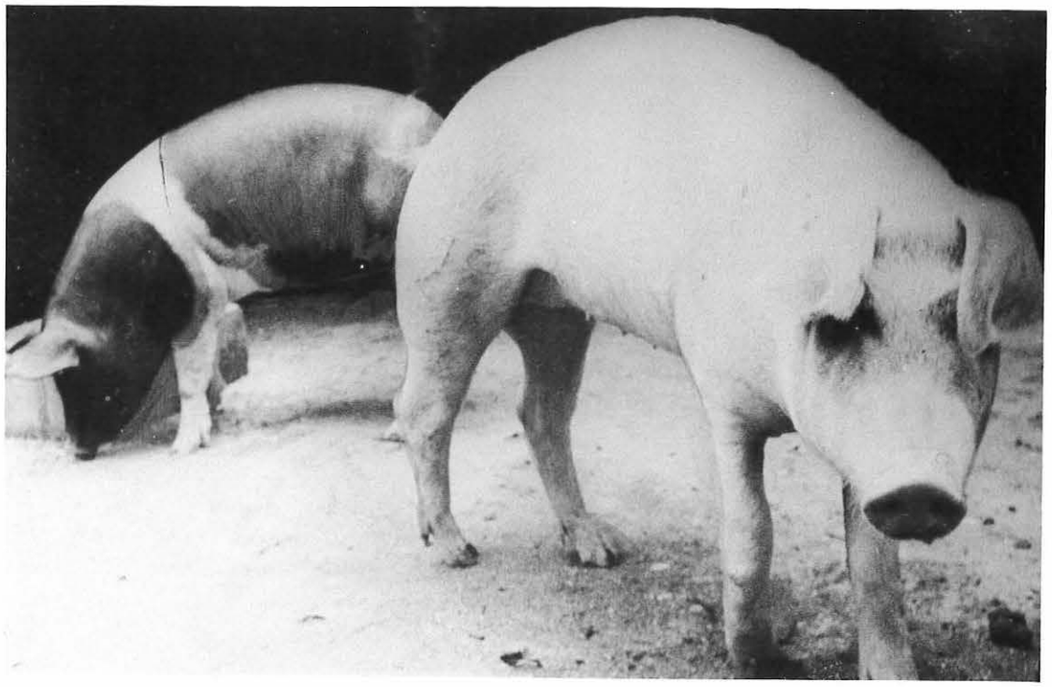
設備の規模から2頭以上飼育することができない。サイはゾウやカバなどと異なりアフリカの草原でも単独で暮らし、繁殖期だけ夫婦生活を営み、オス、メスに関係なく強い方が実権を握る。

サイ王は入園した時発育不良でアバラ骨が浮き出るほどガリガリ、サッちゃんの腹の下も楽にくぐれた。その後遺症か今でもサッちゃんがひと回り大きく、水を飲むのもエサを食べるのもサイ王は後回し。

サイ王が先に食べようとするとサッちゃんが「何よアンタ、私が先よ」と角をふりかざす。

サイ王はスゴスゴ退き、妻のしりの後ろでクークーと悲壮な声で鳴く。孤独な〝恐サイ家〟サイ王クン。その姿は真に迫り同性として他人(?)ごとと思えなかった。

14 ペットとして飼ってみたら？



都会では動物園以外ではめっきり見られなくなったブタ。食卓に上がることを宿命づけられているが、飼えば芸もおぼえるかしこい動物。

ブタ

〝ブタ〟と呼ばれるとたいていの人は不快になる。おとぎ話ではオオカミに食べられたり、雑食性ゆえに〝いやしいもの〟の〝代名詞〟に使われるなど確かにいい役回りではない。それだけにまた親しみやすいポピュラーな家畜ともいえるが、今では田舎の養豚場にでも出掛けぬかぎり、お膳に乗っかる豚肉の生前の姿を見る機会は少ない。そんなわけで天王寺動物園では都会のチビっ子たちのためにちゃんとブタも飼っている。

〝フンガフゴ、ヴィーン、ヴィーン〟と実にけたたましい鳴き声。隣の舎ではヤギが〝メエ、メエ〟と消え入るようなやさしい声で鳴いている。まさに好対照だ。狭い舎の中をせわしなく動き回るさまもにぎやかというか、騒々しいというか。そばを通りかかった子供たちが〝あっ、ブタや〟と大声をあげるが、その声には何となく〝軽べつ〟の響きが…。遠まきに眺めながら「臭いなあ、ブタのフン」などとあたり前のことを言って通りすぎて行く。

ここのブタは、養豚業者から3カ月の子ブタを借りて来て半年間飼育した後、再び返すといういわば〝里子〟のような方式で飼っている。育てているうちに愛情がわいて手放したくなくなるのが飼育係の共通した気持ち。全く他の動物と変わらない。

ブタと人間とのつき合いは古い。ヨーロッパでは紀元前5000年から家畜として飼われ、わが国では慶長１０年（1609）から長崎の出島でオランダ人が飼い始めた。実際、わが国で食用として普及し出したのは第1次大戦以降。今では２０種以上の品種が開発されているが寿命は約１０年と馬（３０年）や牛（２０年）に比べかなり短い。

「肉を大量に取ろうと何度も品種改良を重ねたからでは…」と同園の獣医師、中川哲男さん（36）。成長も異常なほど早く体長２０センチ、重さ1キロの乳呑児が6カ月後に100キロ近くにも育つ。

「本当はきれい好きで人なつっこく、頭のいい動物なんですが…」と中川さんは持って生まれたブタの宿命と抜きがたい偏見を哀れむかのようにポツリ。

15 テレビのおかげでスターに

アライグマ

テレビの子供向けマンガですっかり人気ものになったアライグマ。一時もじっとしないでチョロチョロ動き回る。

オリに向かって手を差し出すと、何の警戒心もなく興味深そうにすりよって来る。この人なつっこさが子供たちや家族連れの人気の的のアライグマ。ほ乳類、食肉目、アライグマ科、原産地は北、中米の山間地帯。

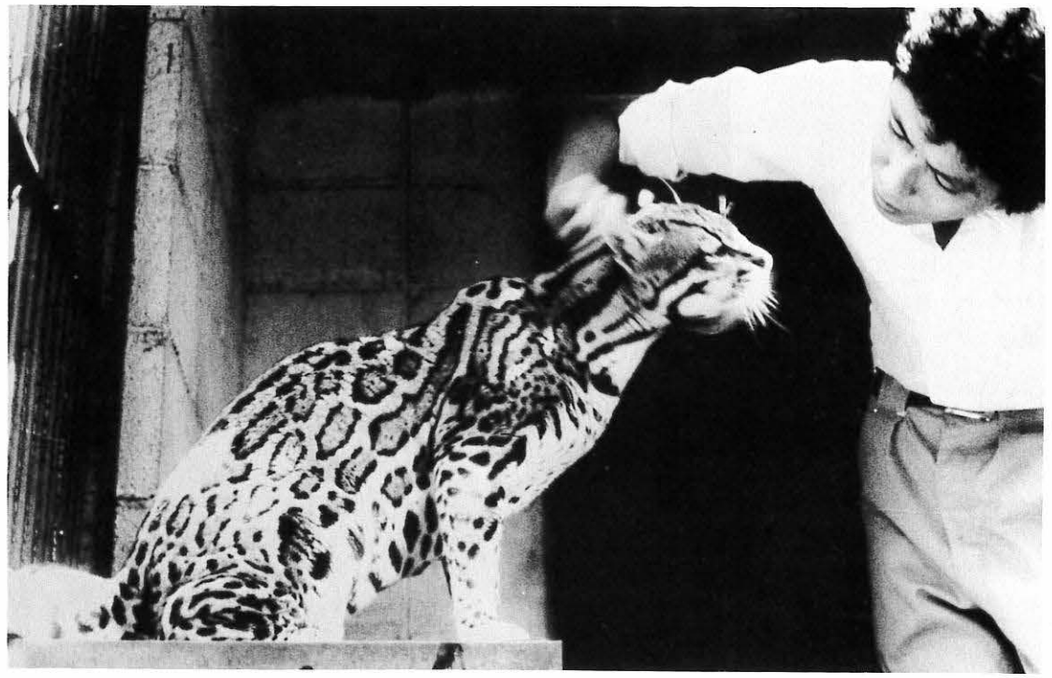
天王寺動物園に初来園したのは昭和１２年１０月１２日というから同園ではかなり古顔。その後何十頭も代変わりし現在は４７年生まれのロッキー、４８年生まれのロージー夫婦にビリー、ボビー、ボギー3兄弟の5人家族。しかし同園のアイドルとして脚光を浴びたのはつい最近。それまではタヌキよりもタヌキらしいとぼけた表情から、見物人たちもてっきりタヌキと思い込んでいた。確かにクマの名はついているが実はタヌキやイヌの仲間に近い。それが3、4年前から「あ、アライグマだ」と歓声をあげてオリの回りに集まって来るようになった。「テレビで子供向けの〝あらいぐまラスカル〟というマンガが放映されてから急に人気が出ました」とキーパーの農本武志さん（31）はいう。

以来、すっかり〝ラスカル〟の名でスターになってしまった。本来人なつこくおとなしい性格で大きさも子犬ほどだからアメリカではペットとしても飼われている。

アライグマの名の由来は「森の木の穴にもぐり込んで夜明けや夕方に川辺でザリガニを取ったりする。その姿がエサを洗っているように見えるので」と農本さんは説明してくれた。雑食性で長い１０本の指を使って何でも器用に食べるし、環境への適応力はバツグン、好奇心も強い。

反面、農本さんが他の獣をさわってオリに入ったりすると臭いが気になるのか用心深く嗅ぎ回ったりする神経質な面も。同行のカメラマンがレンズを向けると、珍しそうに寄って来てはサッと逃げ、ちょっともジッとしていない。ようやく疲れ果てたのか5頭そろって「どうにでもしてくれ」とばかり台上にひっくり返ったのは3時間も経過したころだった。ヤレヤレ。

16 毛皮好きの女性がヨダレを…



『あたいの天敵は人間のメスなの』人見知りするデリケートな動物だが、今ではキーパーになつき、ブラッシングをせがむ

オセロット

オセロット――ちょっと聞き慣れぬ名前だが毛皮好きの女性にはヨダレの出そうな動物らしい。

食肉目、ネコ科。中南米の森林地帯に生息。好物は、やはりネズミ科のアグーチやパカ。木登り上手で樹上の鳥も長い犬歯でやっつける。外見はヒョウを小型にした感じ。体長1メートル前後、黄かっ色に黒色リング状の卵円形のはん点や鎖状に連なっている。耳の裏側に淡色部分があるのが特徴。

天王寺動物園にいるのはメスの「パトラ」（推定年齢9歳）だけ。ペットとしてかわいがっていた市民から48年秋、寄贈されたギャル。人見知りする性格のためか、環境に慣れるまで2カ月近くかかった。

「慣れていた飼い主が帰った後がたいへん。急に荒々しくなって歯をむいて『ウーウー』うなり声をあげ、手に負えなかったもんです」と入園当初の思い出をキーパーの農本武志さん（31）は語る。

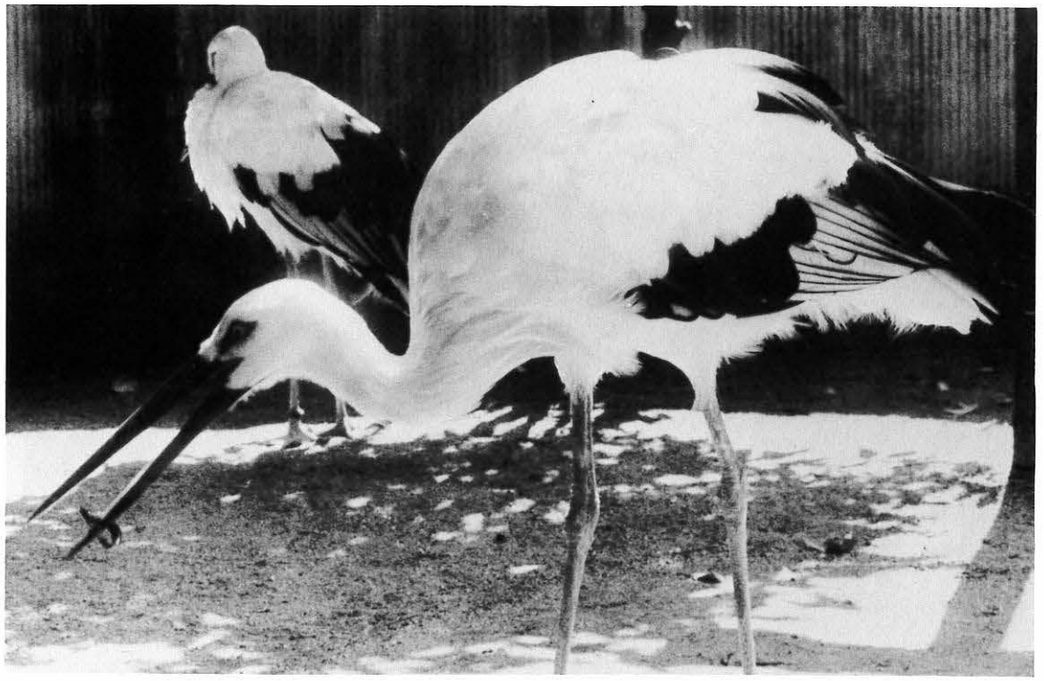
今では農本さんにすっかりなつき、すり寄ってきては日課のブラッシングをせがむほど。このブラッシング、毛つやとスキンシップを増す効果をあげている。

50年、独り寝の「パトラ」が寂しそう、とニュージーランドの動物園からオス（10歳）の「シーザー」が贈られた。だが、「愛があれば年の差なんて」は人間の世界。交尾の意味もわからぬ「パトラ」は「シーザー」が体の上に乗ってくると暴れ回った。頭にきた「シーザー」がツメで「パトラ」の体をひっかいたため、体中が傷だらけになったという。その「シーザー」も6カ月後に老衰死。以来、独り寝をかこつ「パトラ」。

農本さんは「国内の動物園で繁殖例があるのは、上野と王子だけ。オスを入園させてぜひ子供を産ませたい」と言った。

オセロットの天敵は人間だけ。とりわけ、人間のメスのために滅び去っていく悲劇の動物だ。

17 二世の誕生は夫権復活待ち



メスが強すぎて〝夫唱婦随〟は夢のユメ。動物の世界も人間そっくりな夫婦が増えている。

コウノトリ

「幸福をもたらす鳥」「赤ん坊を運ぶ鳥」――こんな伝説をもつコウノトリ。夫婦仲むつまじき姿を連想しがちだが、天王寺動物園のコウノトリに夫婦の理想像を見つけることは難しい。まして、2世が誕生することも…。

同園にコウノトリ夫婦が入園したのは、53年11月。大阪・上海友好都市提携第2次交換動物として上海市西郊公園動物園から送られてきたもの。入園当初は、母国・中国の孔子の教え通り、「妻は夫に礼節を…」とメスは終始控えめな態度でオスに接していた。夫の権威も強く「それなりに」夫婦らしく見えた。そして今年4月。夫婦が仲よく巣材を集め、巣作りを始める。

「スワ、2世誕生か」とキーパーの浅田保夫さん（41）を色めきたたせた。が、間もなくメスがオスを威かくし始める。夫婦の立場が逆転したのだ。いったい夫婦の間に何が起こったのか。浅田さんにもわからない。

2羽の間に生じた〝深くて暗い河〟は広がるばかり。浅田さんが主食のドジョウや好物のミルワームを持って来ると、メスがまっ先にたいらげ、オスは小さくなって残り物をついばむのが関の山。頭を空に向けたメスが体を後ろにそらせ、口ばしを強く打って「カタカタ」音を立てるとオスは恐怖のあまり逃げだすのだ。

この行為は夫婦間の合図と警戒信号。そのためにも、オスはメスに呼応して口ばしをたたかねばならないのだが…。

この〝婦唱夫随〟を解消しようとさまざまなショック療法が行われた。だが、いずれも効果がなかった。

「オスに安心感を持たせようとメスをつかんで怖がらせたり、オスをメスに近づけさせたりしたんですが、その時だけで…。原因はやはり環境にあるようです」と話す浅田さん。

その環境が近く変わる。11月にコウノトリ舎（高さ約13メートル）が着工される。現在の狭いツル舎から新しい舎へ。何はともあれ、2世誕生は〝夫権復活〟待ちだ。

18 往年の大スターが隠居して

往年の大スター、シュジー嬢を中心に〝5人家族〟、シュジーは隠居生活に入り、今はサクラ（右）やヨーコの時代だ

チンパンジー

今年の敬老の日にチンパンジーのシュジーにたくさんの果物が贈られた。今年32歳というから人間の年齢だと90歳に当たる。日本の動物園で飼われている中では上野のチンパンジーに次ぐ長寿の記録保持者。しわだらけの顔には、年輪の跡がくっきり。華やかな娘盛りもあったろうに、すでに足腰にガタがきている。しかし、病気らしい病気にかかったことがなく、いたって元気。温和な性格に物静かさが加わってきた。

5年前から隠居生活。時折、広場に出て日光浴をするが、小高い丘にどっかと腰を降ろしたままほとんど動かない。細長い手を組んでじっと考え込んでいるような風ぼうには〝一家の主〟の貫録も。

まだテレビなど娯楽の少なかった25年前。チンパンジーショーに出演するなど観客の人気者であり、大スターだった。過去が華やかだっただけに昔を思い出しながら感傷にひたっているようにも見える。

ほかに4頭の家族。いずれもシュジーには一目置いている。オスのリカを除いてすべてメス。キャンディ、ヨーコ、サクラはシュジーと比べるとはるかに若く、競ってリカにモーションをかけているが、リカにはその気がない。リカは今でもシュジーが好きなのだ。

シュジーが隠居するまでは2人は恋人同士だった。暴れん坊のリカを優しく手なずけるシュージーとの間にいつしか愛の灯がともったのだ。

が、あまりにも年が離れ過ぎているという理由でリカは引き離され、結局適齢期のキャンディと昼間だけペアを組むようになった。

期待を裏切って、リカの反応は冷ややか。飼育係の青野久雄さん（31）は「やはりリカにはシュジーのことが忘れられないようです。シュジーも日光浴から帰る際、通路の金網越しにリカと出会うと盛んに愛きょうをふりまき、とてもうれしそうです」と教えてくれた。

秋の日が西に傾くころ、わが家に戻るシュジーの後ろ姿にどことなく寂しさが漂う。

19 おねだりのしぐさ可愛く

仲のいい夫婦に〝1人っ子〟という理想的な家族構成。きちんとあいさつもすれば、行儀もよく、チビっ子たちのアイドルだ

マレーグマ

飼育係の原田勉さん(30)が、むしイモを持つと親子3頭のマレーグマは身体をすり合わせて一斉におねだり。放り投げたとたん、父親は左手を高くあげ、首を上下にふって「ありがとう」。母親もきちんと座り両手をひざの上に置いてごあいさつ。なんとも愛きょうのある仕ぐさだ。人間に慣れやすい性格でチビっ子たちのアイドル。

原田さんも「ここにいる3種類のクマのなかでもこいつが1番愛きょうがあります」と、ニッコリ。

天王寺動物園が業者から46年11月に2頭をペアで購入した。6年後の秋、メスのマミーが生まれた。ところが、いまでも母親の乳を吸うという大変な甘えん坊。母親も過保護なのか、ほとんど離れることはしない。

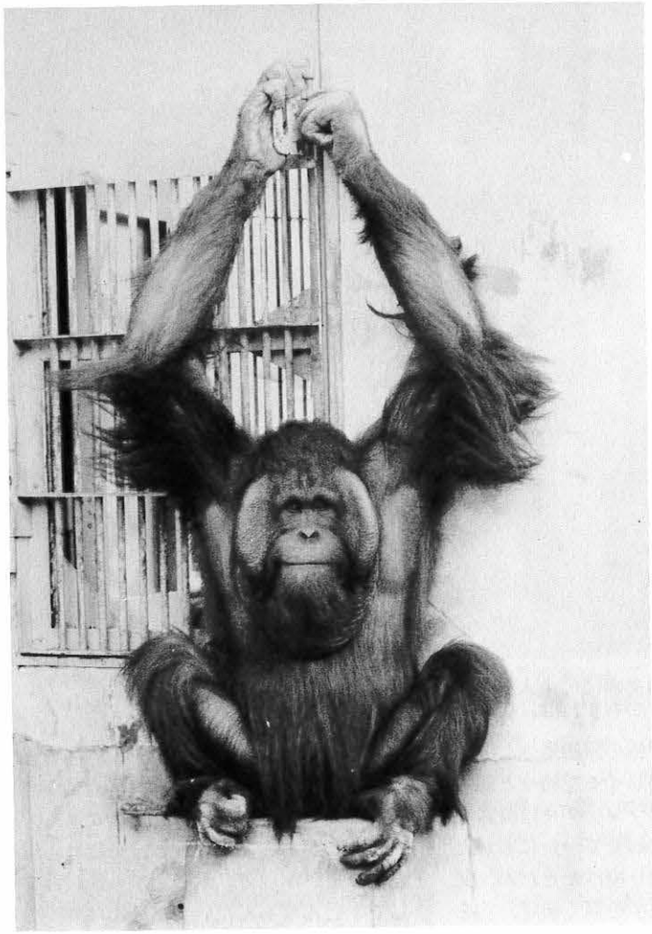
住まいは階段つきのコンクリートづくり。部屋の中をのぞいてみたら、およそ1坪（3.3平方メートル）大の広さ。室内は明るくてどことなくマンションといった感じ。父親の部屋もあるがマミーは母親と一緒に寝起きをしている。朝が早く父親がゆっくりと最後に表に出てくる。どこの家庭でもありがちな光景。

マミーが木によじ登ると、母親は心配そうにじっと目で追いかける。木の上から長い舌をペロリと出して「どんなもんだい」。そんなマミーにじれて木のまわりをウロウロ。

のんきなのが父親だ。大きなアクビをひとつしたあと、ゴロリと横になってお尻をボリボリ。退屈になったのか、妻のそばに近寄っても妻はマミーを気にして冷ややかな反応。しかし、マミーが降りてくると、やっと安心して、今度はゆっくり夫婦みず入らず。

ミケンにしわを寄せるから、ケンカしていると思ったら大間違い。これがマレーグマの特徴とか。夕方近くになると部屋の入口近くで親子が集合。原田さんが部屋の中にごちそうを用意しているからだ。むしイモのほかにソーセージ、リンゴ、バナナなどをペロリとたいらげる。それでも決して子供の分まで取り上げない。仲のよいほほえましい家族だ。

20 精力絶倫ぶりに圧倒されそう



精力絶倫のオランウータンのオス「ブル」ー目下〝女〟になったばかりの「サツキ」を追っかけてタフなところを見せている

孝司さん（35）の調教を受け、なかなか〝芸達者〟。園内行事にもひっぱりだこ。統一地方選挙では模擬投票箱に1票を投じ、キャンペーンに一役。また大東さんが舎内に入ると、寄り添って肩をとったり、「1人にさせないで」と出て行く大東さんを引きとめるほど。動物愛護週間に行われる動物慰霊祭に動物代表で神妙な面持ちで〝玉串奉てん〟をやったりもする。

その堂に入った演技も23日の慰霊祭には見られなくなった。9カ月前「サツキ」に生理が始まったからだ。「大人への過程の区切りとしてやめさせました」と大東さんは語ったが、名演技が見られなくなるのはちょっぴり寂しい気もする。

現在、「ブル」はこの「サツキ」と交際中。もちろん肉体関係もある仲。「オラン」もいるのだが、どうしてか「ブル」とは相性が悪く、おまけに高齢ときているから「ブル」は振り向きもせず「サツキ」ばかりを追い回している。といっても、ふだんは隔離されているため月に1度のおう瀬。

「サツキ」の排卵日に合わせて約1週間同居させ交尾させている。

しかし「サツキ」は、まだメンスが始まったばかりで、妊娠まであと2、3年はかかるのでは……と大東さん。そのころには「サツキ」に可愛いい子供ができているかも。

オランウータン

東南アジアのボルネオ、スマトラに生息するオランウータン。樹上生活が中心で、現地民から「森の人」と呼ばれる〝深慮遠謀〟な動物。外向的なチンパンジーとは対照的な性格。それでもチンパンジーと同様、幼少時から調教すれば、いろいろな演技も身につけられる。

天王寺動物園のオランウータンは「ブル」（オス、推定年令15歳）「オラン」（メス、同22歳）「サツキ」（メス、同9歳）の3頭。

なかでも48年入園の「サツキ」は飼育係の大東

21 じわじわ体内に入り込む針

万博の四十五年、フィリピン政府から贈られたパラワンヤマアラシ。日本では同園にしかいない珍しい動物

ヤマアラシ

全身鋭い針で覆われているが、ネズミのようにひょうきんな表情や動作がご愛きょう。だが野生のヤマアラシはその針ゆえに猛獣のトラでさえ一目置いているクセもの。ほ乳類、齧歯目（げっしもく）の3種6頭が天王寺動物園のヤマアラシ一族。

最古参はヤマアラシ科、インドタテガミヤマアラシで昭和23年に初入園。以後十余頭代変わりして現在37年入園のメス1頭と41年に生まれた子供が2頭。夫君は今年2月に肺炎で死亡して母子家庭。最もポピュラーで体も大きい。

希少価値が高いのは45年、万国博の年にフィリッピン政府から贈られた東南アジア、パラワン諸島原産の同科、パラワンヤマアラシ2頭。わが国では同園にしかいない。

キノボリヤマアラシ科、カナダヤマアラシは50年、同園開設60周年記念にシカゴ市リンカーンパーク動物園から寄贈。が、間もなく夫婦ゲンカでメスはオスの針を受けて死亡。

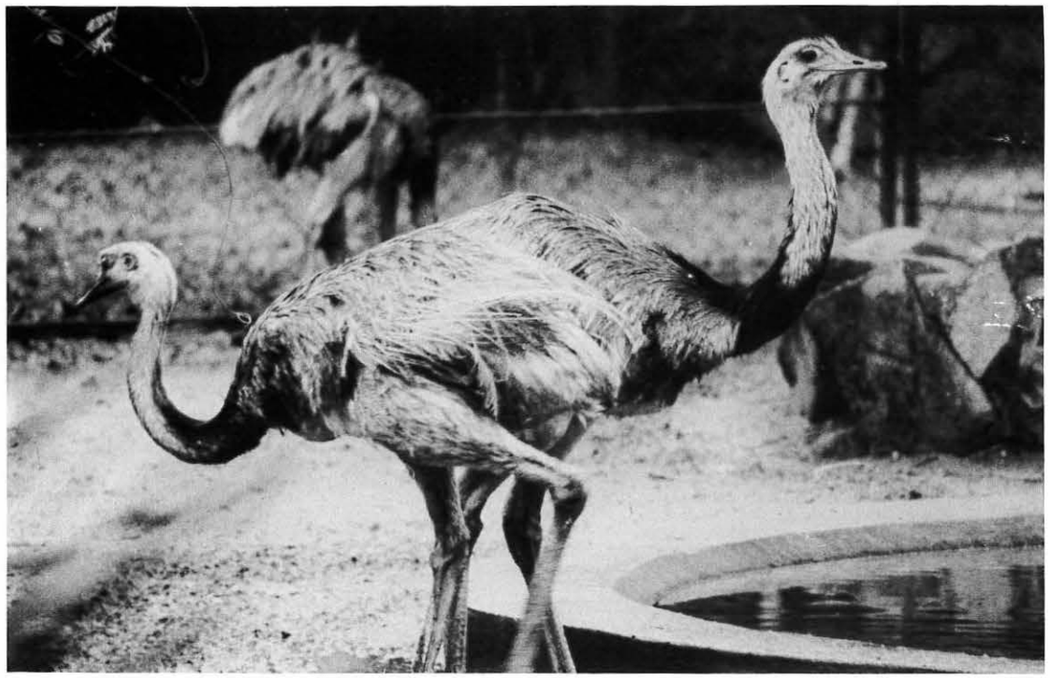
このようにヤマアラシにとって背中の針は最大の武器であり、凶器ともなる。インドタテガミヤマアラシになると太さ1センチ、長さ30センチにもなる。体毛が進化したこの針、根元はサヤ状の筒になっていて生え変わる。先は釣り針のようにギザギザになっていて一たん突き刺さって放っておくとジワジワ体内に入り込んで行くというから恐ろしい。

憶病な性質で自分から襲ったりはしないが、狩りに慣れていないトラの子がうかつに手を出したりすると全身逆毛を立てて威かくする。これにコリてどんな猛獣も一切近づかなくなる。

「この毛を逆立てた姿を見ようと、石を投げたりイタズラする人が多いんです」と同園キーパーの農本武志さん（31）は言う。被害者はたいていインドタテガミヤマアラシ。怒ると毛を逆立てて尾でどんどんと地面を打ち鳴らす。野生の場合だと逃げ出せるがオリの中だと逆に今度は後ろ向きに〝窮鼠猫を噛む〟のごとく突進して来る。

こうなると「もう人間でも手に負えない」と農本さん。それだけ憶病で防衛本能が強いとも言える。おかげでヤマアラシは野生動物の中でも比較的順調な繁殖をみせている。〝寄るな、触るな。ソッとしとけば何もしないスゴイ奴〟そいつの名前はヤマアラシー。

22 ダチョウより指は多いんだゾ



ダチョウによく似ているが、全くの〝アカの他人〟のレア。
小柄ながら憶することなく堂々としている

レア

アメリカダチョウの異名をもつレア。南米のアルゼンチン、ペルー、ボリビアなどの草原地帯に生息する、ダチョウの4分の1くらいの大きさ。もちろん、ダチョウ同様、走るのが得意。が、威容、走行スピードといい、すべての面で本家にヒケをとる。指の数が3本あり、これがダチョウより1本まさっている。馬をみてもわかるように足指の数が少ないほど走行スピードが増すという。

天王寺動物園のレアは、現在、5羽。メス（45年入園）とオス（同52年）の夫婦から3羽のヒナがかえっている。初めてヒナがかえったのは54年8月。12個の卵（1個・13センチ.×9センチ、600グラム）から2羽がかえり、1羽が人工育雛器で育てられた。1年後には、1人前の体に成長。両親の中に混じっていても、どれが親か子かは見分けがつきにくい。

さらに今年5月末〜7月末にかけ、7羽のヒナが誕生。うち2羽が「ピーピ」鳴きながらスクスク育っている。

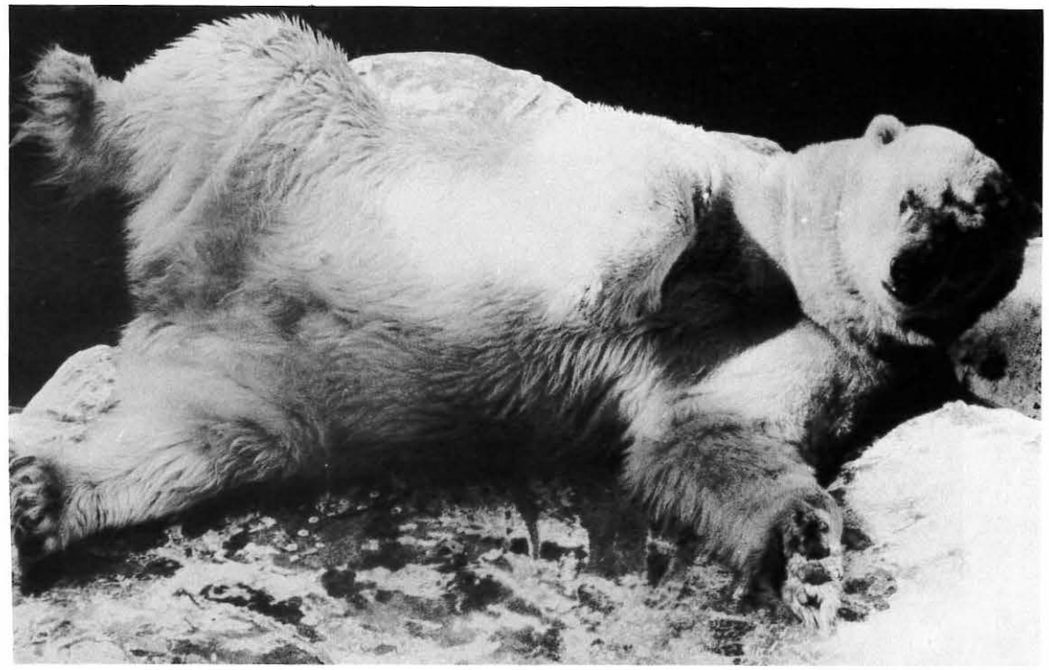
レアの産卵期は5月末ごろ。オスが首の毛を逆立て、メスに向かって羽を広げるディスプレーを始めると繁殖シーズンが訪れる。巣作りはもっぱらオスの役目。人目につきにくい場所にドカッと腰をおろし、ゴソゴソしているうちにできたクボ地にメスが卵を生む。

ヒナをとりあげる時、キーパーの大野尊信さん（35）をオスがつつきにきたり、脚げりにかかるなど反抗。もっとも親子のキズナの強さはその時だけ。6月から子供とも〝他人の関係〟。

飼育にもさほど骨を折らない動物。「乾燥地帯に住んでいるので、冬場のカゼがちょっと気がかりなくらいで…」と大野さん。

ダチョウ舎と隣接しており、サク越しに双方が並ぶとレアの貧弱さがやけに目立つ。それでも、動作に憶するところがない。ダチョウが長い首を伸ばしてちょっかいを出してもわれ関せず。生まれ落ちたる星の暗さにヒケ目を持っていないところになんとなく好感がもてる。

23 外敵は酔っぱらいの投石だけ



「オレの昼寝をじゃまするのはだれだ」愛きょうたっぷりのシロクマ君

ホッキョクグマ

毎年、「大暑」の日には、好物の鯨油がたっぷりぬられた氷柱をプレゼントされるホッキョクグマ。シロクマの呼び名の方が一般にはなじみ深い。

クマ科最大で体長2メートル。毛の色は、帯黄白色。氷上生活に便利なため足裏に毛がはえているのが特徴。

天王寺動物園のシロクマ君は、40年入園の「ユキ」ちゃん（オス、推定年齢17歳）と48年組の「チビ」ちゃん（同、8歳）の2頭。

この2頭、1年前から1日交代で運動場と寝室を行き来する別居生活。「チビ」が成長して一緒にさせると〝男同士〟殺し合いをする危険性があるからだ。

食事は1頭につき1日、鯨油手しゃくに一杯、鯨肉7キロ、ソーセージ5本。午後4時以降に寝室で与えられる。この光景はユーモアたっぷり。キーパーの早子幸利さん（53）が寝室に鯨油をおいて、トビラを開けると、運動場にいたシロクマ君がニオイにつられ、中に入ってくる。

最近では、2頭とも食事タイムを覚えてしまったよう。夕暮れ時になると入り口わきのコンクリートの地面を前脚で「ガリガリ」かきながら、エサのおねだり。このため、足裏の毛もすりへって黒い地肌がのぞき、ツメも短くなっている。

鯨油のニオイにつられつられてシロクマ君の重い腰は動く。フンで汚れた体をきれいにさせる時もその手口。

早子さんがプール内へ鯨肉やパンを投げると中へ「ドボーン」と飛びこみ、汚れた体もきれいサッパリ。

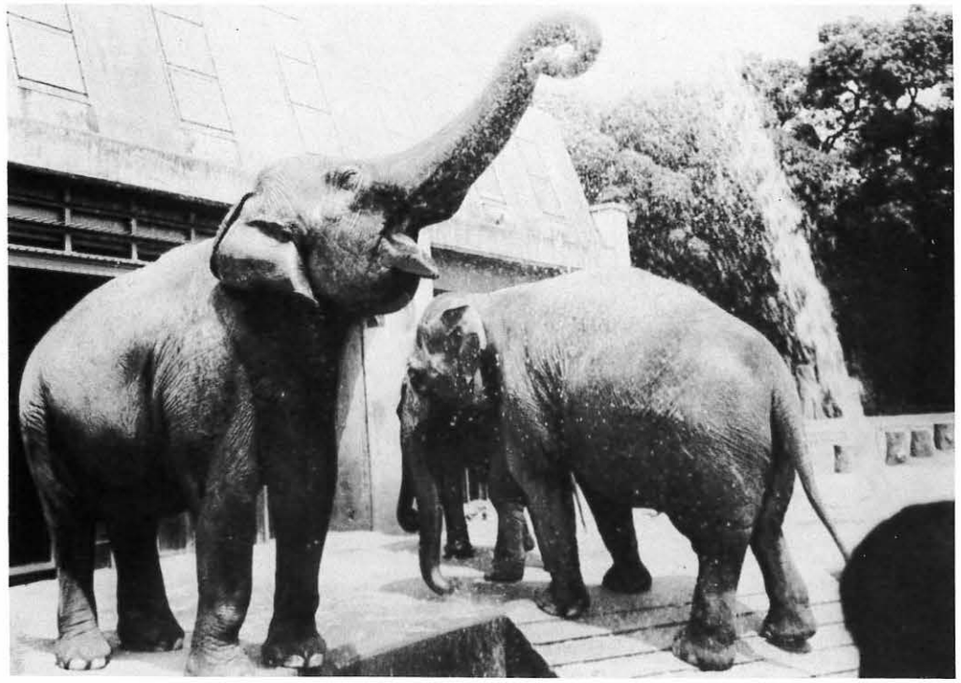
気温の変化に適応しやすい動物。

「病気はしないし、エサもちゃんと食べてくれ、飼いやすい動物です」と早子さんも語る。

シロクマ君の外敵は酔客の投石だが、〝防衛〟の術も心得たものだ。コンクリートのタテの背後に身を伏せ〝銃弾〟から身を守るという。

最大にして細心北極ならぬ大阪の環境にもピッタリ適応してきたのでは。

24 やることなすことケタ外れ



三頭合わせて十一トンという〝女性〟ばかりのゾウ一家。ここでも年配順に序列があって〝秩序〟が保たれている

ゾウ

カバやサイも及ばない陸上動物の〝大物〟登場、とくればゾウ。ほ乳類、長鼻目、象科、アジアゾウ、普通インドゾウと呼ばれる3頭が天王寺動物園のゾウ一家。この一家、実は全く血のつながっていないメスばかりの寄り合い所帯。

最年長が昭和２５年４月に入園した春子、次が同年６月入園の百合子。最年少の博子はそれから２０年後の４５年５月、万国博を記念してインド政府から贈られた。

同園には戦前からゾウは在籍しており、なんでも大阪府立博物場から同園に寄贈された際、当時本町橋近辺にあった博物場から天王寺の新居までノッシノッシと市街を行進した。沿道には見物人が群がり、それはもう大変な騒ぎだったそうなー。

戦時下、ゾウたちも猛獣処分にあい、一時同園から姿を消す。戦後、私人から春子と百合子が寄贈され、ようやく再登場。以来、３０年間けんからしいけんかもせず仲良く暮らして来た。

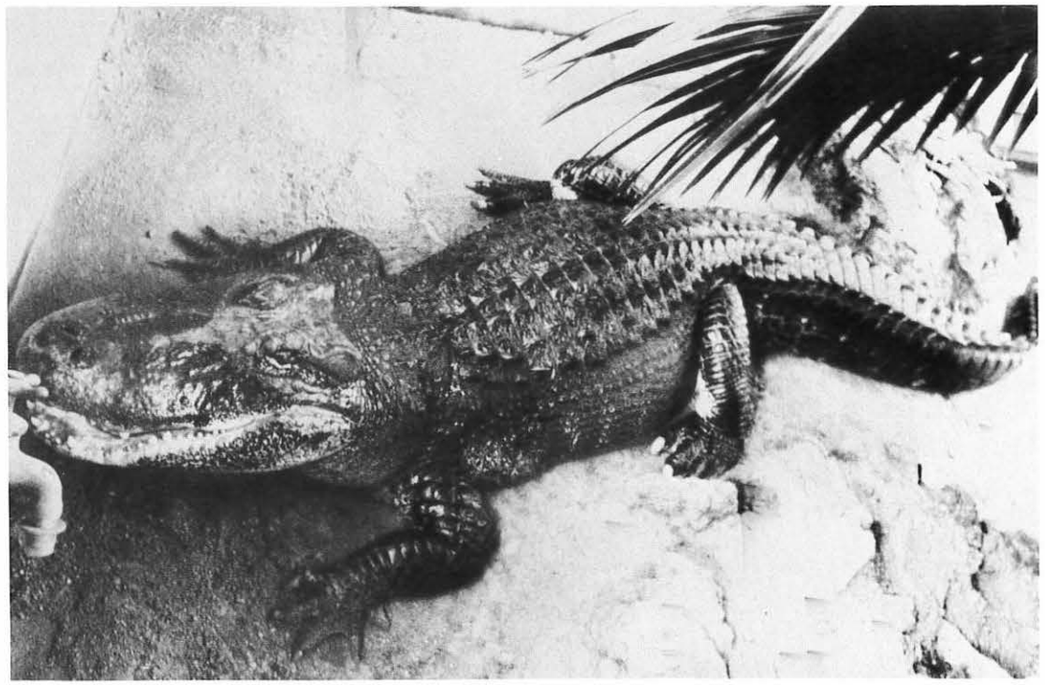
巨大な体に似合わず、おとなしい性質のためだが、それでも３頭間の〝序列〟はやはり整然としている。

「１番体の大きい最古参の春子がリーダー格。次に百合子、博子の順」とキーパーの柴田総さん(25)。エサを食べるのも、運動場から舎に帰るのもすべてこの順序だ。ゾウはこの柴田さんと東政宏さん(36)のコンビで面倒をみている。彼女達の体重を計るのもキーパーの年に１度の大切な役目。春子は4.831トン、百合子は推定で約４トン、博子はまだ小さく2.29トン。しかし博子でもカバの成獣ほどの重さというからやはり大きさでは群を抜いている。寿命も長く７０年は生き、成長するのに 15～18年 かかるというからほぼ人間並み。

しかし人間には思いもつかぬいたずらぶりも発揮する。怪力で重い鉄の扉のレールをはずしたり，やることが人間とはケタはずれ。中でも真ん中の百合子はきかん気が強い。

「百合子だけ他の２頭と違い、全くキバがない。まるでその劣等感を人間にぶつけてくるよう」と柴田さん。ゾウといえどもやはり女性、容姿の〝欠点〟が何かと悩みの種（？）なのだろうか。

25 いつまでもハイこのポーズ



ワニでも愛情をもって接すると理解しあえる関係になるという ── ミシシッピーワニはこの一頭だけ

ミシシッピーワニ

岩石のような体を地面にはいつくばらせるミシシッピーワニ。時折、鋭い目をギョロリ。ほとんど動かない。天王寺動物園を訪れた家族づれもついに根負け。しびれを切らしたちびっ子が「パパ、このワニ死にかけてるの？」「うーん、そうかもしれないね」── ワニ舎の前でよく聞かれる会話。

キーパーの芝野利夫さん（24）は、ワニとつき合って今年で３年目。いつも感じることは「ひとつのポーズをとったらほとんど動かない」ということ。

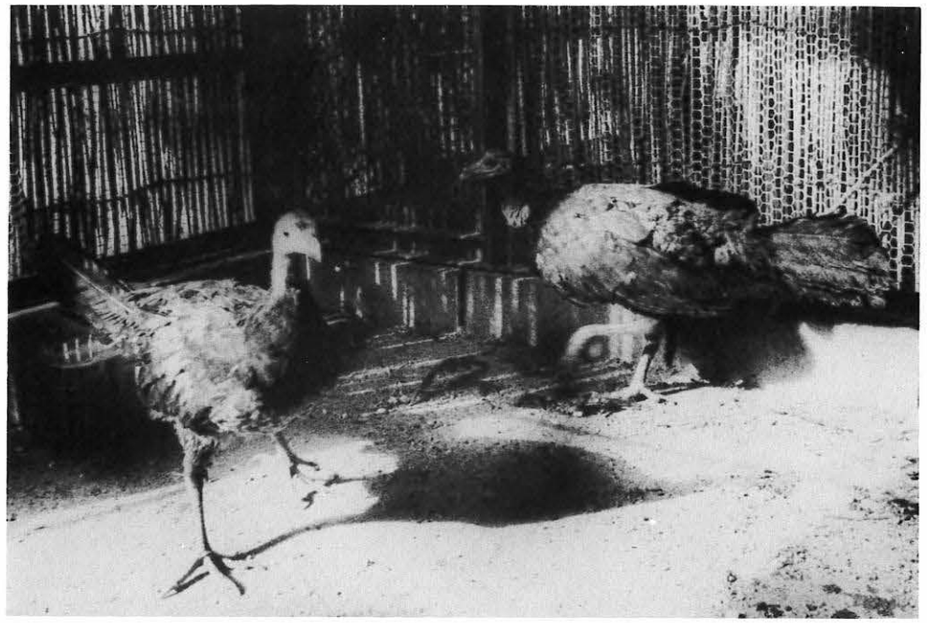
だからといって近寄ると危険だ、と注意する。芝野さんの左手には約１０センチほどのタテ一文字のキズ跡がある。別のワニにエサを与えていた時、いきなりかまれたものだ。縄張り意識が強く、体臭に気づくとスッと体をひる返して、威かくするらしい。

この話をそばで聞いていた同行のカメラマン、傑作を撮ろうと室内に入ったとたん、突然「スーッ」という鼻息をたてながら近づいてきた。芝野キーパーがいたため突進して来なかったが、２人とも大あわてで外へ脱出。突然の侵入者に興奮のさめないワニ君、しきりに壁をたたき追跡の構え。

こうした危険の中で、芝野キーパーとワニとの会話が長い間、続けられた。人と動物とのふれ合いは、言葉が通じないので心で接しなければならない。猛獣やは虫類はなおさらのこと、絶えず足を運び相手から敵対意識をとり除くことが先決となる。それと慣れたからといって油断は絶対に禁物。最後まで注意を怠ってはならないという。

ワニは毎週１回、芝野キーパーから与えられた食事をする。いまでは鉄の棒をもって室内へ恐る恐る入ることもなくなった。そばまで近づくことができる。「やっと自分の気持ちが分かってくれたと思うと、可愛くてたまらない」と芝野キーパーはうれしそうに話してくれた。

26 ともかくオスは忙しいヤツ



土を掘るか、エサを食べるか、とにかくじっとしていないオーストラリア産のヤブツカツクリ

ヤブツカツクリ

国際保護鳥７種、親善使節３種 ── 天王寺動物園の鶉鶏（じゅんけい）舎は質量とも国内一の規模を誇る。キーパーの大川光雄さん(35)も「大事な鳥たち、ケガしたら大変」と飼育に汗だくだ。その大川さんが「こいつの習性はほんまにおもろいワ」と苦笑するのがヤブツカツクリ。

オーストラリアの乾燥地帯に生息するヤブツカツクリ。入園は５４年６月末。大阪市とメルボルン市が姉妹都市となった記念にメルボルンからワライカワセミと一緒に贈られた夫婦２羽の珍鳥であり、例によって親善使節。

この鳥の巣作りの仕方がユーモラス。オスが長い指と立派なツメで地面をかき、土や落ち葉を積み重ねる。その高さは1.5メートル、直径４メートルに及ぶという。メスは、その上に卵を産み落す。メスの役目はそれだけ。卵は落ち葉などの醗酵熱で温められ、自然ふ化するわけだ。その適温（約３５度）を維持するのが大変な仕事。オスがツカに口ばしをつっこんで、温度を計り、そのつど土をとったり、積んだり修正する。もっとも親らしき務めはそれだけ。ヒナがかえっても子育ては我関せず。

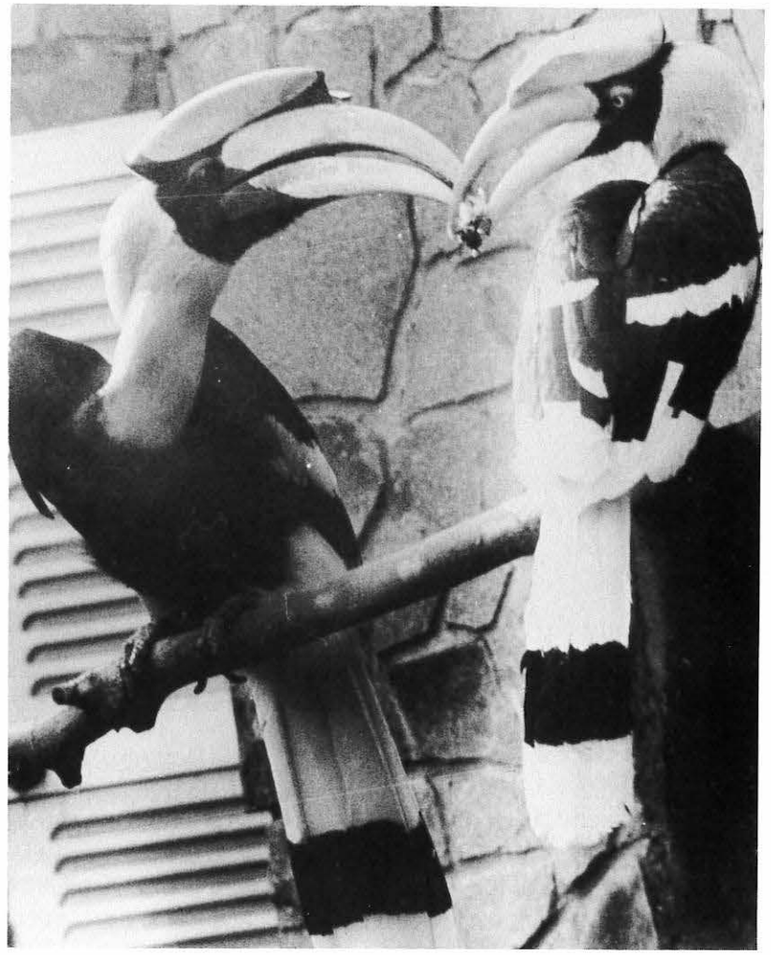
ツカツクリは地上生活のため、脚が太く、羽を使わずに高さ1メートル以上の止まり木にジャンプする。養配や青菜を主食とするが、ハツカネズミを脚でつかみ、ひきちぎって食べることもあさめしまえ。

７月末までクジャク舎にいたが、現在は夫婦２羽で生活。オスの権威が強く、発情期にダンスを始めたオスが〝肉たれ〟を風船のようにふくらませると、メスは恐怖で逃げ回るという。それでも、今年５月から９月にかけ、月平均４個の卵を産んだ。しかし、今の環境では自然フ化でかえすことは不可能だ。

「地下ケーブルをひいて温熱板で温められたらいいんですが。まあ、１、２年様子をみて人工受精することも考えてるんですが…」と大川さんはいう。

オスの動作はまことに忙しい。土を掘るか、エサを食べるか、たえず体を動かさないと気がすまないらしい。エサやフンをつかんでは、後ろへ放り投げ、３～４時間で５０～６０センチの高さに積み上げてしまう。大川さんがツカをつぶして、舎内を掃除すると、また同じ場所に作るというから、ほんまに疲れる鳥ですね。

27 ブランコなら一日中でも….



ブランコの上でラブコールを繰り返すオオサイチョウ

オオサイチョウ

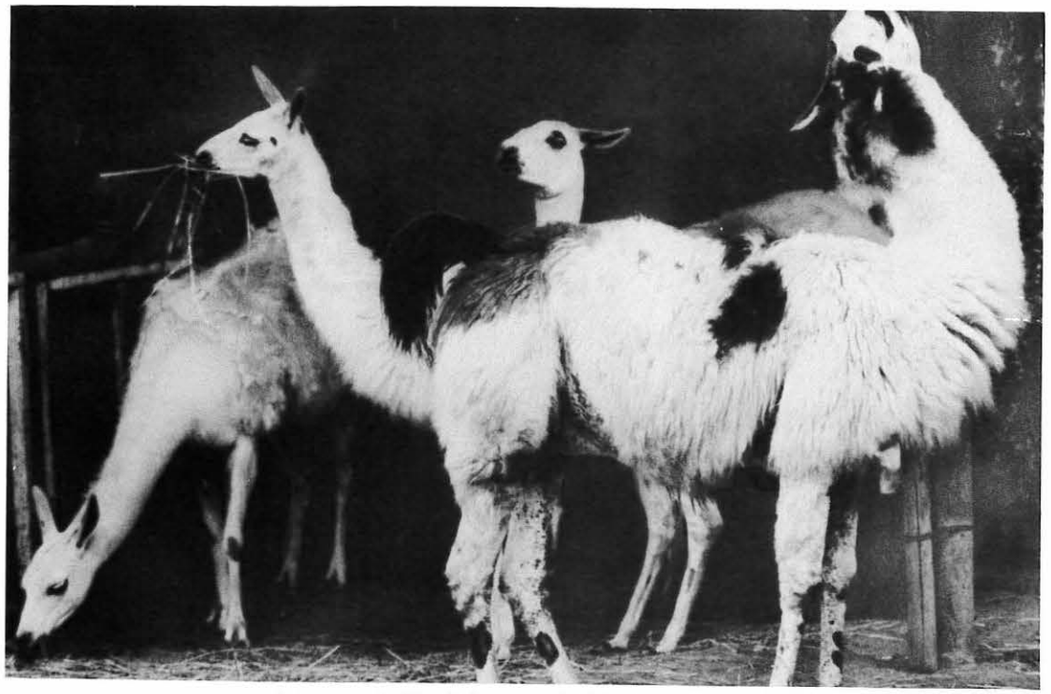
両足をそろえてピョンピョンかけまわるオオサイチョウ。不格好だが、その仕草に愛きょうがある。いま天王寺動物園には雌雄４羽が同居。秋の柔らかい日差しを受けながら、ゆらりゆらり揺れるブランコの上でラブコール。大きく曲がった口バシで盛んに羽毛をつつき合っている。温和な性格なせいか闘争などはしない。のんびりと平和な暮らしを続けている、といった感じだ。本籍は東南アジアのジャングル。名前のとおり両翼を広げると約２メートル近くもある。飛行の壮観さを確かめたかったが、どうやら彼らにとって、仕切られた今の住まいは羽根をのばすところまではいかないらしい。期待をよそにいつまでも同じポーズ。

そばに案内してくれたキーパーの松村幸治さん（２４）は「この鳥は気ままなのでしょうか。１日中ブランコの上にいることもあります」と、のんびりした性格を語ってくれた。南方系の鳥類のようにハデさはない。体も白と黒で地味な色合い。いかにも玄人好みのする羽毛を持っている。半ばあきらめていたところ、最年長の雄１羽が、サッと羽を広げ松村さんのそばまで近寄ってきた。首を少し左に傾けてこちらにあいさつ。松村さんは右手をのばしやさしく彼にこたえる。手のひらに鋭い口バシが信号を送る速さで上下に刻まれている。「こんな時、この仕事をしてよかったと思います」と、松村さんの白い歯がこぼれた。

オオサイチョウに限らずトリは神経質な動物だ。それだけにキーパーにとっては根気比べとなるわけ。絶えず足を運んで自分の存在を知ってもらうことから始めなければならない　という。そして、相手より優位に立つ心がけが必要でナメられてはならないらしい。

キーパーと動物たちとの言葉のない対話、日々の積み重ねで芽生えたふれ合いが、大きく育ってゆく──。

28 鼻の穴を開いたり閉じたり



おとなしい性格で家畜としても重宝がられているラマ

ラマ

インディオのふるさと、南米ペルー、アンデス地域の寒村からやって来たラマ。有史以来、人間とのつき合いは古く、3000年以上も昔栄えたインカ文明の時代にすでに家畜化され、野生の種は絶滅していたという。ラクダの仲間であり、とぼけた表情もラクダそっくりで〝コブのないラクダ〟とも呼ばれる。

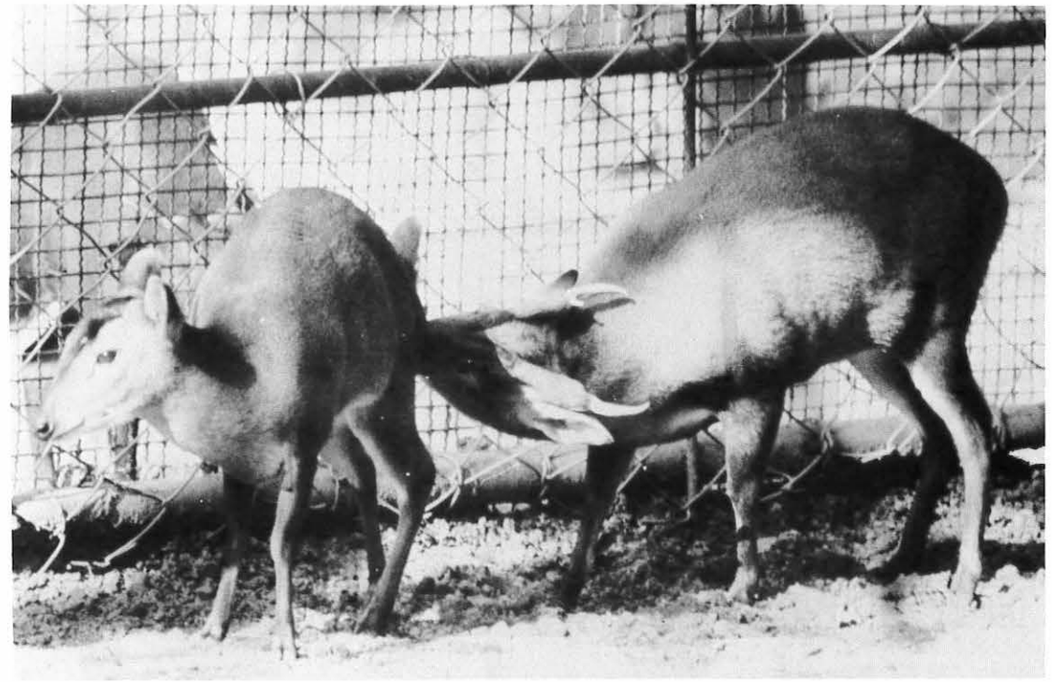
現在、天王寺動物園には昭和４７年入園のオス、ゴローのほか、４８年入園のメス、ホワイティ、この２頭の子で５２年誕生のメスのマリー、そしてゴローとマリーの子で５４年に生まれた〝名なし〟のメスの計４頭がいる。隣にラクダ舎があり、体こそ小さいが生態的にもほとんど変わらない。胃袋が４つあり、反芻（すう）動物であることや怒ると胃液のようなツバをはき出すほか砂漠の砂ぼこりを防ぐため自由に鼻の筋肉を収縮して穴を開いたり閉じたりするのにはビックリ。

家畜のため、人なつっこく、とくに大病をすることもない。飼育にさえ気をつければ２０年くらいは生きる。ただ日本のように湿った空気の夏の暑さには弱く、同園では水をまいたりヨシズを張って日陰をこしらえたりしているが、他の動物園では毛刈りをして暑さをしのいでやったりもする。

人工ほ乳で大きくしたラマは人間になれすぎて成長しても再びラマの群れには戻らないといわれる。マリーは生まれた時、ひ弱で母親の乳が吸えなかったので、キーパーの葭谷文彦さん（３１）は人工ほ乳で育てながら母乳を吸うコツを忘れぬよう工夫した。ラマ舎を２つに仕切って、母親の姿を見せながらマリーにヤギの乳を与えていた。マリーがやっと歩けるようになったころ、仕切りを取ってやると、マリーはためらわずに母親の乳房に吸いついた。

「あの時はほっとすると同時に感動的でした。人工ほ乳は難しく、いろいろと問題もあるが、親の姿を見せて行うことも１つの方法だと思います」と葭谷さんは語る。動物の習性を失わせず、人工哺育に成功したいい例かも。

29 おく病だが権力争いはシ烈



ガラスのようにデリケートなキョン。気が立つと思いもかけぬ狂暴性を発揮する

キョン

シカの仲間は憶病で用心深く、おとなしい性質として知られている。中でもキョンはひときわ憶病で、動物園で捕獲しようと網をかけただけでショック死した記録が残っている。

偶蹄目、シカ科、キョン属キョン、原産地は台湾、中国南部、戦前中国の一部が日本の属国だったため開園当初から天王寺動物園に住みついている。日本に近いアジア産のせいか風土や気候的にもなじみ、順調に繁殖し、現在オス３頭、メス２頭。５２年４月に生まれたメスが最年長で今年４月に生まれたオスが一番年下。しかしこのキョン一族、ウォルトディズニーの漫画「バンビ」を思わせるような小柄な体に似ず、オス同士の縄張り意識、権力争いには山口サン、松田サンとこ以上のものが。

３頭のオスのうち１頭はまだ子供で権力争いには参加していないが、残り２頭はシ烈な〝戦争〟を繰り広げ、敗れた１頭は舎の隅に追いやられボスの顔色をうかがいながらエサを食べる遁（とん）世生活を強いられる。オスは頭に２本の角と口に鋭い犬歯を持ち、これを武器に突いたりかんだりして闘う。

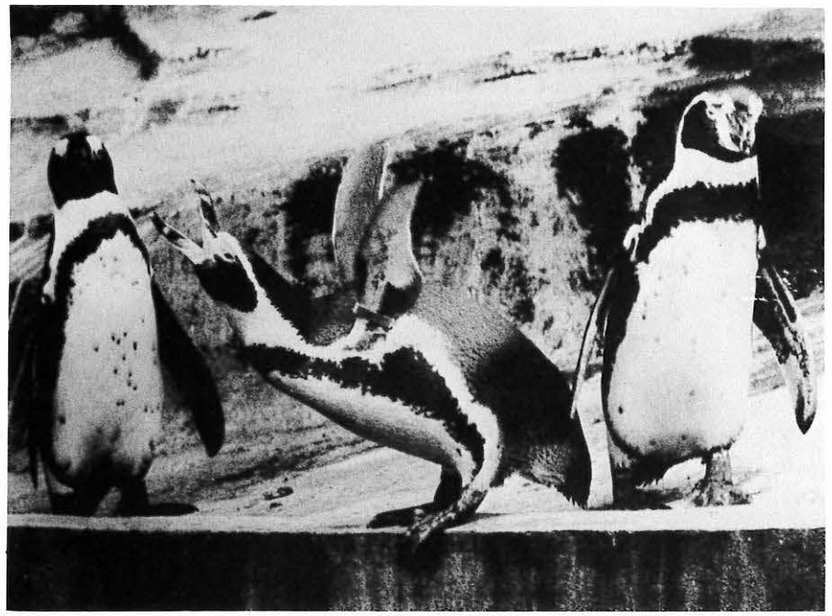
「野生のキョンは広い樹林に住み、眼下腺から臭いのする粘液を樹木にすりつけテリトリーを表示するので、めったに争うこともない。動物園では限られた範囲で何頭も飼うため、どうしても縄張り争いが生じる」とキーパーの葭谷文彦さん（３１）。

「権力争いというのは接近した力を持つ者同士の間で始まり、子どものうちは問題ないが、１年半もすれば成長して父子でも縄張り争いをする。その前にトレードに出さなくては…」と付け加えた。

交尾期、角の生え変わる時期など〝木の芽どき〟になるとますます神経質になり、エサをやろうと手を差し出したキーパーに向かって行き、ゴム長ぐつをかみ破ったこともあるそうだ。どんなにおとなしい動物でも時には思わぬ野生の牙（きば）をむき出しにする。おだやかなキョンの姿を見ながら改めて動物飼育の難しさを感じた。

30 飛べない空仰ぎパタパタ

空を仰いではばたいたりプールに飛び込んで見事な遊泳を見せる人気もののフンボルトペンギン



ペンギン

〝氷のお山にすべり台ー、いつも気取ってエンビ服ウ〟。テレビのコマソンでもおなじみのペンギン君。飛べもしないのに空を仰いで羽を広げバタバタさせる姿が何ともご愛きょうだが、目のあたりにするとかわいさがよく分かる。

天王寺動物園には現在、戸外の水槽にフンボルト、ケープ、その雑種の三種十四羽が、また背中合わせの冷房室内にキング、イワトビ、ジェンツー、マカロニ、マゼランの五種十七羽がいる。ペンギンというと南極に住んでいるとばかり思いがちだが、生息範囲は広く赤道に近いガラパゴス諸島や南米、チリー沿岸などにも住みついている。元々ペンギンの呼び名は北大西洋にいたオオウミガラスを指していたのだが、オオウミガラスが絶滅し現在のペンギンがその名を受け継いだ。

同園には昭和１８年からおり、現在いる種ではフンボルトが最も古く昭和４１年から。最もポピュラーなのもフンボルトで繁殖力が強く、はばたいては水槽に飛び込んだりしてショーマンシップを発揮している。

「しかし何といっても最も目にとまりやすいのはキングペンギンですね」とキーパーの浅田保夫さん（４１）。身長は１メートル以上あって黄、アイ、黒など色あざやかな毛並みに赤い口バシが印象的。

鳴き声にしてもジェンツーが〝クワックワッ〟と雑音めいて鳴くのに比べキングは〝クアークアー〟と甲高いきれいなテノール（？）だ。やはり〝王様〟の貫録十分。いたって性質はおとなしいが、むやみに人間が抱きかかえると怒って口バシでつつく。ケープとフンボルトはさすがに強いが、その他は５月中旬から１０月下旬まで冷房室で過ごす。

冷房室に収容する時、５、６年前までは浅田さんがいちいち抱きかかえて入れていた。しかし、怖がって水の中に飛び込んだり、なかなか思うように行かない。そこでペンギンの意思を尊重し、追いたてながら自ら進んで入るよう仕向けたところ、それまで１時間３０分もかかっていたのが２０分ですむようになったそうだ。エサを持って浅田さんが姿を見せると取り囲むように「クックック」── その姿を見ていると、ふと鼻歌が出る。　ペンギンペンギン可愛いーな。

31 飛べない奇妙な鳥

鼻の穴が嘴の先にある飛べない鳥　キーウィ　当園の目玉である

キーウィ

天王寺動物園で飼われている200種余りの鳥のなかで珍鳥中の珍鳥といえるのが〝キーウィ〟。日本で飼われているのは、この〝ニュージー君〟という名の雄只１羽だけ。

キーウィは鳥でありながら全く飛ぶことができない。しかも夜行性で土の中のミミズや虫などを食べている。そんなわけでキーウィの翼は退化してしまい小指の先ぐらいしかないし、鼻の孔は他の鳥と違って嘴の先の方にある。また、嘴の根もとには長い毛がはえていて触角の役目をしている。こんな奇妙な鳥はほかにはいない。

ニュージーランド以外には住んでいない鳥で国鳥となっており、厳重に保護されており国外へ出されることもほとんどない。そんなキーウィが天王寺へやってきたのは１０年前、大阪で万国博が開かれた時ニュージーランド政府より１番が贈られた。入園後まもなく雌は死んでしまったが、雄は長年飼育記録を更新中である。

「夜行性でそのうえに非常に神経質な鳥なんです」と担当の天王寺動物園で只１人の女性キーパーの磯田さんは言う。入園当時、飼育の苦労は大変だったようだ。餌はミミズが主食でドジョウやパンなども食べる。現在、ミミズを購入できるが、当時はそんなものを売っているところはなく、養殖しなければならなかった。ミミズを集めるのに２～３時間もかかった。レーズンやグリンピースなどいろいろな餌をやったが、やっぱりミミズがいちばんよかったとのこと。長寿の秘訣はミミズにあるのかもしれない。

夜行性なので、他の動物のように明るいところでじっくりと健康状態を観察することができない。神経質でちょっとしたことで餌を食べなくなる。飼育の苦労はつきない。

そんなキーウィが、磯田さんと合唱をするようになったのである。歌をうたいながら餌をもってきた磯田さんの声に合わせて〝キーキー〟鳴くのだ。こんな例は他の動物でもめったにあるものではない。動物と人間との間にできた深い信頼関係の証拠であろう。

そんな〝ニュージー君〟になんとかしてお嫁さんを迎えたいものだ。

32 赤ちゃんをさずける伝説の鳥

ヨーロッパでは赤ちゃんをさずける鳥といわれるヨーロッパコウノトリ
子育ても上手で日本一の繁殖数

ヨーロッパコウノトリ

園内を歩いていると遠くから、カタカタカタ……となにか乾いた拍子木を叩く様な音がする。ハテ……と音の主を探すうち、天王寺動物園御自慢のフライトケイジ、水禽放養舎の前に出た。どの鳥かな、と目で追っているとカタカタ音は上から降って来た。音の主はヨーロッパコウノトリであった。

地上約9 *m*の所にいくつかの人工巣が設けてある。この上に各1・2羽ずつコウノトリが止っている。そしてその巣へもう1羽が飛んで来ると、飛んで来た方は「ただいま」と云う風に、そして巣に居た方は「おかえり」と言いたげに、互いに嘴をカタカタと打鳴らしながら首を激しく前後に振っている。これはどういうことか、と考えていると、隣で大きな眼を細めながらコウノトリを見ている背の高い人に気付いた。この人が園一番のノッポで、そして、この放養舎を担当している飼育係の池内春夫さん(34)であった。素人考えを述べてみると豈図らんや正解であった。つまり声を出せないヨーロッパコウノトリはこうして嘴を打鳴して、「おかえり」、「ただいま」と話し合っているとか。

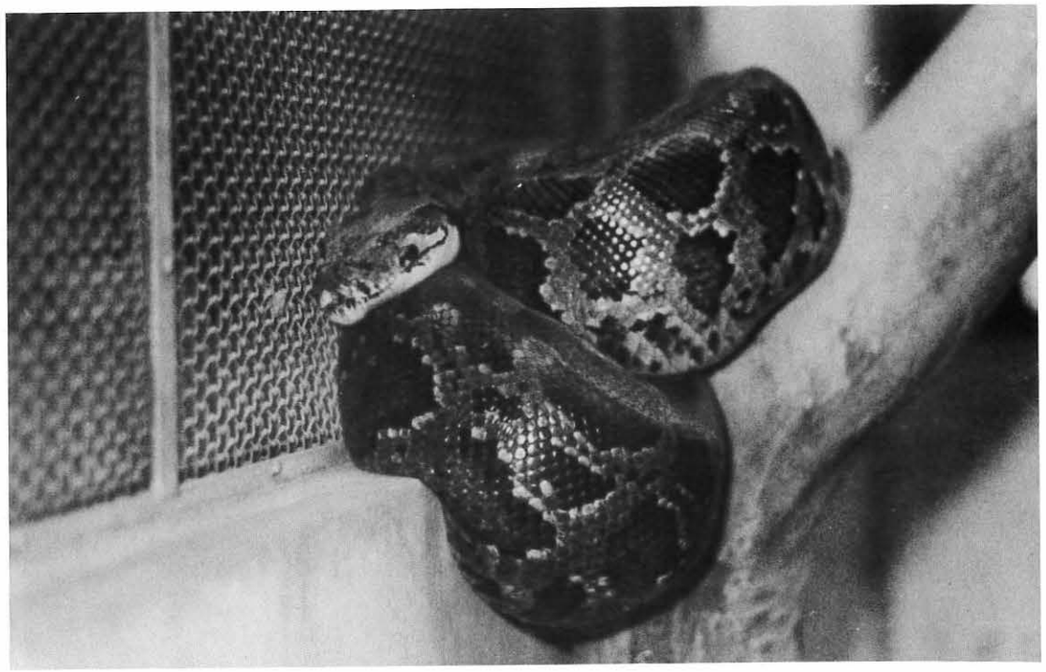
「それは愛情細やかな鳥でしてネ、卵は両親で熱心に暖めて、ヒナがかえったら両親で懸命に育てるのですヨ。エサの魚やドジョウを運んだりはもちろん、暑い日はヒナの体に水をかけてやったり、翼を拡げて日陰を作ってやったりしましてネ。」池内さんの眼が一層細くなり、眼尻が下った。

昭和36年12月、一番のヨーロッパコウノトリ夫妻がオランダから入園し、昭和39年、日本初の繁殖に成功した。これを皮切に順調に繁殖を続け、今年は53羽目のヒナが育ったとか。大変な記録である。

池内さんの大きな眼が輝いた。「私らネ、この鳥が目的ではないんです。目的はニホンコウノトリですヨ。」大変な意気込みである。このヨーロッパコウノトリで得られた多くの貴重なデータを来年以降日本初の飼育下での繁殖を目指し、ニホンコウノトリにぶつけると言うのである。幸い来年初めにはニホンコウノトリ舎が完成する。

また降って来たカタカタ音を聞きながら、あと2・3年もすれば今度はニホンコウノトリのカタカタ音の合唱が聞けるな、と思った。

33 衣替えのお手伝いも命がけ



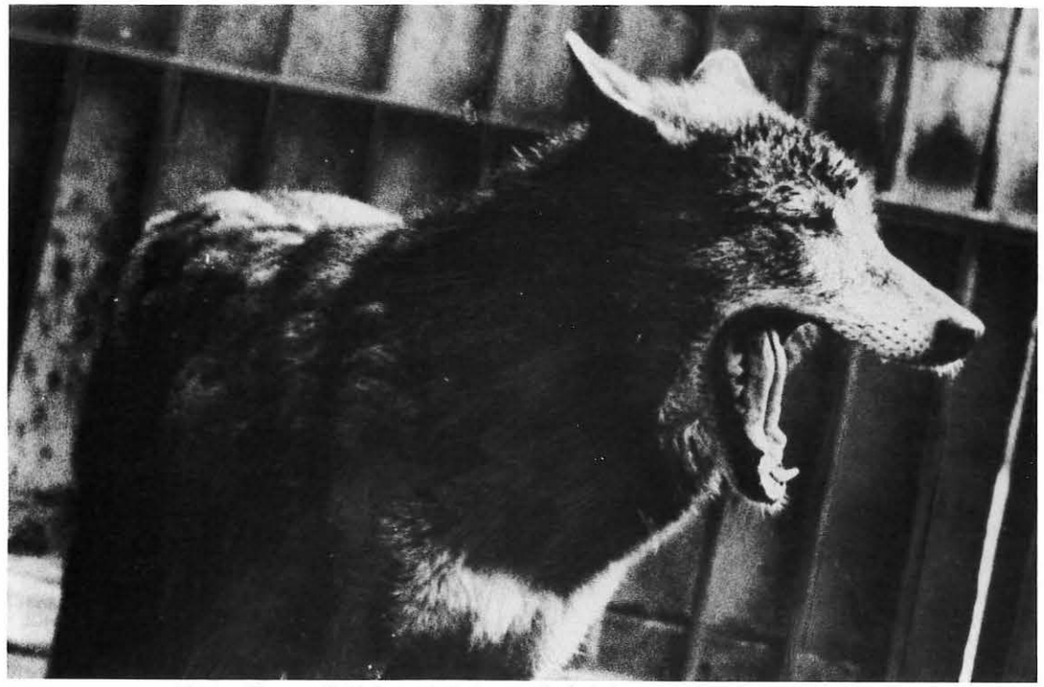
どっしりと とぐろを巻いた姿には
ヘビの王者としての風格が

インドニシキヘビ

人間も季節に応じて衣服を替えますが、動物も春から初夏にかけては夏毛に、秋には冬毛にと換毛を行います。これは鳥類にもあてはまることで、年に1・2回換羽が見られます。ヘビも年に数回の脱皮を行い古い皮をぬぎすてますが、この脱皮の状態でヘビが健康かどうか分ります。ヘビの脱皮は、脱皮の2～3週間前に全身のウロコにつやがなく汚れた状態に変わり、目は白く不透明になります。ヘビの動作は鈍く食欲は全くなくなります。やがて白濁していた目が澄んでくると数日後に脱皮するわけで、鼻先をこすり老廃化した角質層を体をくねらせながら裏返しに脱ぎすてていきます。

ところで動物園のように人工的な環境や条件のもとで飼育していると、この脱皮が完全に行われないことが多いようです。この脱皮が不完全のままですといつまでも健康によくないので、時には人間の手でこの脱皮を手伝ってやらねばなりません。ハ虫類を担当すること、10年のベテランの古戎三男さん(32)もヘビが脱皮の徴候を示し始めると毎日毎日が心配で気のぬく間もありません。脱皮が完全にできたかどうかを確認すると共に、脱皮後に始まる猛烈な食欲を満たしてやるための餌の準備もしなければなりません。長さ1 *m*程度のアオダイショウやシマヘビですとこの脱皮の手伝いも簡単なのですが、大型のヘビになるとそうもいきません。悪いことに当園でも大きなインドニシキヘビが脱皮をいつも完全に行えず、年に2・3回は、この皮ムキを手伝ってやらねばなりません。長さ約4 *m*、鹿ぐらいの大きさの動物なら簡単にしめ殺すだけに、頭を押えている手首、腕に巻きつかれる時の力は相当なものです。以前は1人で押えて皮ムキをできたのですが、ニシキヘビが大きくなるにつれて、古戎さんも身に危険を感じるほど巻きつく力が強くなってきました。そのため最近では2人がかりで古い皮をはいでやるのですが、少しでも力をぬこうものなら手首に巻きつかれ、なかなかほどけないので手の感覚がなくなるほどです。それにしても、いつまでこの脱皮のお手伝いをさせられるのでしょうか。

34 孤閨かこつパンダ並み珍獣



異国の地で二世誕生も見ぬままに先立たれたメスの「シャオイン」

クロオオカミ

東京がパンダなら大阪はクロオオカミ ― 大阪市と上海市の友好都市提携を記念に親善使節として上海から天王寺動物園に「ターシン」（オス）と「シャオイン」（メス）のクロオオカミ夫婦が贈られてきたのは４９年８月。

クロオオカミは１８７４年、チベットで最初に発見されるまで存在さえ知らなかった珍獣。中国の東北地方に住み、全身黒い毛に覆われている。世界の動物園では共産国を除いて同園にしかおらず、まさに〝パンダ並み〟だ。それから６年の歳月が過ぎた―。

現在、舎内にいるのは「シャオイン」だけ。昨年１月３０日「ターシン」が心不全でなくなったからだ。だから今は独り寝をかこつ〝未亡人〟。

クロオオカミは寒冷地に生息しているため、恋のシーズンは寒い冬。〝夫婦〟健在のころは毎冬、年末から翌年にかけて二世誕生が同動物園のトピックスだった。

入園当時から、夫婦の世話を焼き二世誕生を待ち望んでいた飼育係の正木時雄さん（42）は「その当時はいつ子供が生まれるかと思ったものですが、オスが亡くなったあとはエサをやるだけで……」とチョッピリ寂しげだ。後添へのオスの来園が待たれるところだ。

入園当時５ケ月だった「シャオイン」も６歳になった。オスの「ターシン」は野性味たっぷりに威風堂々としていたが「シャオウイン」は神経質で憶病だ。部屋のスミからスミへうつ向き加減にウロウロと歩き回っている。ひとりぼっちの寂しさがその動作にも現れている。ツキの輪グマのように胸前に白い毛が輪状に広がり、ときおり灰色の鋭い視線を放つのはさすが。

食欲はおう盛で夕刻、正木さんから２キロ近い鶏肉や馬肉を与えられると一気にたいらげてしまう。早朝には「ウォー」という遠吠えも聞こえる。夫を待ちわびる叫びにも聞こえるようだ。

35 動物の胃袋に合わせ大忙し

飼料係

３５２種の大世帯ともなれば、動物たちの食事の世話もたいへん。

獣医、キーパー、飼料係 ― この３位一体で献立が運ぶ。年間予算を立て、執行するのは獣医、業者が運んでくる飼料を各担当キーパーに分配するのが、飼料係といった役割。

飼料は毎日、午前９時から午後４時の間、業者から運び込まれる。現在、取り扱い業者の数は約３０。納入された飼料は、そのつど獣医と担当キーパーが検査。それを終えた後、飼料係が１日の分量を各担当キーパーや研究室のカゴにふりわけていく。

物価の値上がりで動物園の台所のやりくりもたいへん

某月某日 ― 青菜６０キロ、サツマイモ８０キロ小アジ８１キロ、馬肉６０キロ、ドジョウ５キロ…。取り扱う飼料３１種、穀類を含むと計６０種類にのぼる。

動物たちの胃袋を一手に引き受ける飼料係の鈴木克治さん（３３）はまさしく多忙。それぞれの動物が食べやすい大きさにイモやくだものをカッターで切る。また、動物たちは熱いものが苦手なため、イモや卵は前日にむし、冷蔵庫で冷やす。１日にむす量はイモ１２キロ、卵４９個。

野菜や魚類は気候に左右され、係員たちを悩ませる。しかも、年間予算額内で抑えねばならない。今夏の冷害で青菜は青草、サツマイモはナンキンに、と家庭の主婦並みの苦労が続いた。

「エサの増減で動物の健康状態がよくわかるんですよ」と鈴木さん。なるほどキーパーが訪れては、担当動物のエサの調整を鈴木さんに要請している。

客が多い日曜日には、客が与えたエサの食べ過ぎで、翌日には下痢やフンづまりを起こす動物が続出する。それを見越して担当キーパーは意識的にエサの量を減らしたり、開園前に与えるなど、細かい神経を使っている。それでも甘党のサルはビスケットが大好物で客が与えるエサを食いすぎることがある。

母親代わりの飼料係、キーパーが赤字会計をきりつめて献立てた〝手料理〟に舌つづみを打つ動物たち。裏方さんのそんな苦労は動物たちにはわからない。

36 園外からも急患や保護願いが

大きくなりすぎて動物園に引き取られたウサギ

動物病院

動物だって人間と同じ。けがもすれば病気もするし虫がわくこともある。

天王寺動物園の西詰め一角、カバ舎の近くに研究室兼動物病院がある。ここの獣医さんたちは年間500件以上の動物の治療にあたる。また検便、検尿、血液、細菌など700件近い検査もしている。

「野生動物の場合、外敵に襲われぬよう本能的に痛いとか苦しいなどの弱みを見せることはタブー。そのため外観ではどの程度病気が進んでいるか見極めるのが難しい」と同園獣医、長瀬健二郎さん(28)はいう。症状が一見して明らかになるころにはすでに手遅れのことが多いとも、そんな時、獣医さんの心に去来するのは「なんで早く気づかなかったのか」という言いようのない心残りだという。動物とキーパー、獣医の信頼関係と観察力ーこの3位一体の関係がどれだけ大切であるかを思い知らされる。

園内の動物の治療は往診が大半。先日もアカカンガルーが足の指の付け根を負傷し、ウミがたまって大きくはれあがっていたのを切開手術したばかり。常時２０件ものカルテの処理に追われている。

そればかりではない。動物病院では思いもかけぬ外来の〝急患〟も収容している。市民がペットで飼育している生まれて間もないサルの子供はともかく、「世話をして欲しい」と鳥やタヌキが持ち込まれる。イヌやネコは動物管理センターで引き取るが、それ以外は動物園が面倒を見ざるを得ない、と長瀬さん。

「絶対大きくならないヒヨコがニワトリになった」「タヌキ を車ではねてしまった」「朝、家の庭にコミミズクが落ちていた」などあれやこれやで約２０種４０匹もの鳥獣類が保護されている。

「木材置き場で1メートルものトカゲが出て来た、つかまえてくれ」との通報でパトカーよろしく飛び出すこともある。

〝保護願い〟で最も多いのはキジバトなど野鳥類。けがや寄生虫などで衰弱しているものばかり。病院で治療をして全快した後、放せるものは再び放してやる。ここはいわば動物たちが翼を温める願ってもない〝休息の場〟でもある。

米穀・飼料・ペットの餌

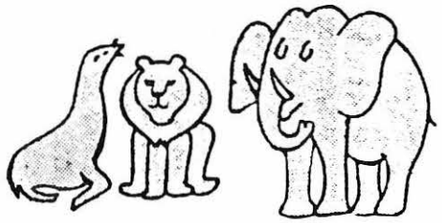
草食動物用・飼料製造直売

SN 泉南飼料有限会社

岸和田市宮前町 TEL. 岸貝(0724) 45—4545
45—4546
23—3413(自宅)

鳥獣・飼料直輸出入・全国卸

全国動物園水族館御用達



鳥獣貿易 有限会社 吉川商会

本 社 神戸市中央区中山手通3丁目11番4号 ☎(078)221-8195・221-1517
飼育場 小野市来住町1513番地 ☎(07946)3-1528